

---

# リリカルなのはStrikerS ~ 管理局変革への軌跡 ~

飛龍明浩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリカルなのはStrikerS 管理局変革への軌跡

### 【Nコード】

N7581N

### 【作者名】

飛龍明浩

### 【あらすじ】

何でも屋を営む少年、セツナ・カミヤマ。レジアス中将に頼まれ六課に行くことに。

## プロローグ（前書き）

仕事の作業に詰まったので書いてみた。  
反省はしている。後悔はしていない！

## プロローグ

とあるスラム街の中、一軒の店がある。看板には赤いネオンで『 Devil May Cry 』と書かれていた。だが、その店を抱えているのは銀髪で赤いコートを着ているスタイリッシュな男ではない。果ては、その某人物が店を携えている場所でもない。

この店が存在する場所の名前は、彼らの世界ではこう呼ばれていた。「第0管理世界ミッドチルダ」と。

「正直なところ、この対戦車ライフルとロケットランチャーは個人で携行するには問題が有ると思うんだ」

『 上手く扱えないからと言って文句を言わないでください。それなら、この追尾レーザーなんかどうなんですか？ 』

「ごめん、それもうまく扱えない」

ミッドチルダのスラム街にある Devil May Cry。二つの声はこの店内から聞こえる。片方が男の声で、もう片方が女性の声である。しかし、店内にある姿はただ一つ。彼の前には一台のテレビと薄い四角い機械。そこから空の手元にコードが伸びている。彼の手元を見ると、コントローラーが握られていた。どうやら機械の正体はゲーム機のようなのだ。

画面には赤いロングコートを着た男が死神のような敵に向かって銃弾を打ち付けたり、剣で切りつけたりしている。

『 結局のところ、二丁拳銃とショットガンで落ち着くのですね 』

「個人的にはこの二つが取りまわしやすからねえ。格闘武器に関してはあのヌンチャク的なものと、ギターは扱いにくい。あと、スタイル。ロイヤルガードでジャストガードとか無理すぎる。トリックマスターはそれなりに使えると思うがあいにく俺は使いこなせん。ソードマスターとガンスリンガーが一押しだな。クイックシルバーはまあ、困った時の切り札だ。ドッペルゲンガーは性能はなかなか面白いが、持続時間がどうあがいても十秒ぐらいってのがな」

『文句タラタラですね、それにトリックマスターではなく、トリックスターです』

彼が座っている付近には、ゲームソフトが入っていたと思われるパッケージがあった。そのゲームのタイトルはこう書かれていた。

『 Devil May Cry 3 Special Edition』と。

彼の名前はセツナ・カミヤマ。英名で名乗ってはいるが、彼はれっきとした地球出身である。

両親はいまだ健在で個人で病院を営んでいる。後から知ったことだが、この二人はミッド出身だった。

子供のころは医者になろうと決心おもっていたが、魔法という存在に出会ってからは、そちらの方面に進もうと考えた。

実のところ、魔法と出会ってからはしばらくはどちらの道に進もうか悩んでいた時期もあったが、彼の将来を決定的に決めるものに出会ってしまった。ゲームの Devil May Cry シリーズで

ある。某ゾンビと戦うゲームの四作目の開発過程でスタッフの悪ふざけからできたゲーム。その主人公にほれ込んだ彼は、自分もこのように戦いたいと思い魔導師をめざした。が、本人の性格はゲームの主人公のようにはならなかった。ちなみに、陸戦Bランクの魔導師である。

続いて、彼のデバイスについて説明しよう。デバイス名は『アイリス』、インテリジェンス型のデバイスである。機構としては汎用魔法の補助とバリアジャケットと呼ばれる防護服の展開のみである。インテリジェンス型なのにしょぼい機能しかないと思われるこのデバイスだが、このデバイスに搭載されているあるシステムがそれを補っている。

このデバイスは、複数のアームド・ストレージデバイスを統括している。マスターであるセツナの指示を受け瞬時に登録されているアームド・ストレージデバイスを取り出し・格納を行っている。彼の知人である製作者が悪乗りして作り上げた逸品だ。

「とりあえず、いったん休憩つと。今日の予定は何かあったっけ？」

『昼にレジアス中將から来るようにと連絡が入っていますね。それ以外はこれといって仕事はありません』

「中將か。一体何の用事だろうなあ」

ミッドチルダ地上本部の実質トップであるレジアス・ゲイズ中將セツナが彼と出会ったのはなぜが存在していた屋台のおでん屋である。

セツナはおでん屋が有るらしいという噂を聞きつけ、見つけた先で同席したのがレジアスであった。最初はお互い会話をしなかったが、酒が回ってきたのかレジアスがセツナに絡み始めたのだった。

自分は地上のトップにいるが最高評議会の人形として祭り上げられているにすぎないとか、一般人が知ってはいけないようなことをばやし始めた。セツナはこの言葉を聞いてしばらくの間、管理局から自分に暗殺の刺客がこないか冷や冷やししながら生活したのは余談である。

さらには、昔は理想に燃えていたが友人たちが所属していた部隊のメンバー全員が大けがを負ったのを切っ掛けに強攻策で地上の改革を進めてきたが、本当にこれでよかったのか、とか自分は犯罪者なんだとか、トップの人間が口に出してはまずいセリフのオンパレードであった。

それ以降、セツナはたまにこのおでん屋でレジアスと会話を交わしていき、何でも屋である Devil May Cry の事務所の後見人になってもらった。有る意味、彼の事務所は地上本部ご用達の店なのである。

地上本部：レジアス執務室前

扉をノックする音が聞こえ、入れとレジアスは許可をだす。入ってきた人物は、レジアスが呼びつけていた人、セツナであった。

「セツナ・カミヤマ、ただ今到着しました」

「ああ、楽にしてくれ」

楽にしてくれの一言に、セツナは備え付けのソファアの上に勢いよく座り、背を伸ばす。レジアスは、その様子を苦笑しながら見る。

「相変わらずのだらけようだな」

「最近寝不足なんだよ」

欠伸を噛み殺しながらセツナは答える。実際、ここ最近寝不足なのは確かな事実だ。

『いきなり、Devil May Cryシリーズを一作目からやり直すとか言いだすからですよ。ああ、いまのとおり原因はゲームのやりすぎです』

「本当に相変わらずだな」

レジアスの表情が苦笑いからあきれ顔に変わった。そして、セツナの正面に座り彼に持ってきた資料を渡す。

「これは？」

「まずは中身を読んでくれ」

資料は新設部隊「機動六課」の詳細が書かれたものだった。何気なしにセツナもその資料を見ていたが、読み進めるにつれてどんどん表情が険しくなっていく。

「おいおい、どこかと戦争でも始めるのか？」

「いや、事件の即時対応能力向上の為の試験部隊という名目で設立



された部隊だ」

「いや、まあ、それはいいんだが、正直なところ戦力過多だろ。SランクやニアSが合計七人とか、アホか？」

「まったく。そんなに戦力が余っているのなら地上に派遣でもしてまわしてくれればいいものを」

「しかもフォワード部隊の新人も将来化けそうな奴らばかりだな」

資料を読み終わり、レジアスと一緒にセツナも頭を抱える。ロス・トロギアを担当するとはいえ、ここまでの戦力を集める意味がわからない。さらに、隊長陣はリミッターを付けてまで所属している。

「で、お前の視点から見てこの部隊どう思う？」

「まあ、間違いなく事件は解決できるだろうな。それに管理局でも有名どころが集まっている。広告塔としては十分な部隊だろうな。海にとっては」

そう、この部隊を設立したのは地上ではなく本局といわれている管理世界を統括している部門なのだ。レジアスが妥協を覚えるようになったので、最近では落ち着いているが、本来地上と本局の仲は最悪と言っているほどわるい。こんな部隊、本局で結成するならともかく地上で作るとしたらまず間違いなくレジアスが反対するであろう。そう考え、セツナはレジアスの方をみる。

「設立にはもちろん私も反対した。一か所にこんな戦力を集めてどうするのか、という疑問もぶつけてな。しかしながら、この部隊のバックにいる人物が強敵すぎる。かの三提督までいるのだからな」

「なるほど。で、こんなことを聞くために俺を呼んだんじゃないだろ?」

「ああ」

先程の気だるそうな表情から一変し、二人は真面目な表情になり向かい合う。

「お前には地上所属の民間協力者としてこの部隊に所属してもらいたい」

「期間は?」

「部隊の設立は来月。最長でその月から一年間だ。あらさがしのよきな真似をさせることになるが」

「そういうのは慣れっこだ。あいつに頼んでアイリスのリミッター付けてもらうかなあ。さすがに手札をさらしたくないわ」

「本局のやつらがなぜこんな部隊を設立したのかは分からん。だが、俺にはこの部隊が今後の管理局全体を大きく揺るがす存在になるかもしれないと感じるんだ」

「中将がそこまで言うなら、そうなんだろうな。わかった、引き受けるぜ」

「ありがとう。細かい資料の方はあとで送付しておく」

「了解」

こうして、セツナは機動六課へと所属することとなった。物語は  
ついに動き始める。

## プロローグ（後書き）

東方より書きやすかった件。手元の資料の豊富さでいったらなのはシリーズのほうがあるからなあ

一話（前書き）

初感想に感動した俺ガイル

## 一話

### 機動六課部隊長室

機動六課部隊長室。ここには、部隊をまとめる上位職をもつ三人が集まっていた。集まったメンバーは部隊長である八神はやて、スターズ分隊長の高町なのは、ライトニング分隊長のフェイト・T・ハラオウンである。

はやては、二人に対して一枚の資料を見せた。そこには急遽入隊することとなった人物のデータが書かれていた。書かれていた名前はセツナ・カミヤマ。我らが主人公である。

「名前は、セツナ・カミヤマ。地上所属の民間協力者で魔力ランクはB。せやけど、Aランク以上の犯罪者を過去数回捕まえた経験があるみたいや。実力の方は問題ないみたいやな。というか、欲しい戦力や」

二人に資料を見せながら、大まかな説明を行うはやて。しかしながら、二人の表情はいまだに微妙そうな表情を崩せないでいる。

「でも、地上所属扱いなんだよね？」

「せや」

なのはの質問にははやてが答える。返答を聞くと、表情を変えずにそのまま資料へとまた目を落とす。

「現場の経験も豊富そうやし、ライトニングの二人のフォローを頼

もうと思つとる」

「でも、地上所属なんだよね？」

「確かに、本局と地上との仲は最悪や。せやけど、この人物は地上預かりなだけで民間の協力者や。表面上の対立はだいぶ落ち着いてきたから余計な火種はまきたくない。かといって、スパイということとも考えられる。当分は様子見やな。そういうことで、この人と宜しく頼むで」

「了解」

「ん、わかった」

はやての説明に二人はとりあえず納得し、久々に三人で一緒の場所働けるね、などと雑談を始めた。そして、しばらくすると部隊長室に來客が訪ねてきた。

六課前

早めに家を出たつもりだったが、予想以上に交通機関が込んでおり到着に時間がかかってしまった。

『ここが勤務先ですか。マスターの職場よりきれいですね』

「いや、築何十年の場所とできたばかりの場所を比べるのはおかしいだろ」

『ここで私が全力を出せるわけですね。今からわくわくします！』

「無視か。あと、全力も出せないからな。基本装備の二種類以外は全部オーバーホール中だから」

先日、アイリスの武装にリミッターをかけてもらおうように開発者のもとへ訪ねたが、その開発者が急に暴走を始めてしまった。

「ふむ、なるほど。武装のリミッターか。しかしながら、私のデバイスにリミッター等という機構は存在しない。ゆえにかけることは不可能だ！だが、めったにこない君の頼みだ。全ての武器をオーバーホールをしようではないか」

などと開発者が全ての武装をオーバーホールを始めてしまった。内心、リミッターぐらい付けるよとぼやいていたが、自身が生成できる最高魔力値を思い出し、別に要らないのかと落ち込んでしまった。オーバーホールは使用頻度の高い二種類の武器を真っ先に終わらせてもらった。他の武装は順次オーバーホールが済み次第こちらに送ってくれるそうだ。

「しかし、地上所属というだけで疎まれそうな予感がするぜ」

『そりゃ、表面上鎮静化したとは言えまだまだ仲が悪いですからね』

「とりあえず、部隊長に挨拶だな。アイリス、ナビを頼む」

『了解しましたー』

と、いうことで部隊長室の前についたのでノックをする。中から「どうぞ」との声がかかったので入室。ちなみに今更だが服装は地



上部隊の制服である。

「囑託魔導師、セツナ・カミヤマ。着任の挨拶に参りました」

中を見渡すと、教導隊の高町なのは一等空尉とフエイト・Ｔ・ハラウン執務官もいた。おそらく直前まで打ち合わせのようなことをしていたのだろう

「ん、宜しく。部隊長の八神はやてや。もうちょっとしたら開設式が始まるから、そちらの方に行ってもらっていいか？」

「了解しました」

どうやら思ったよりも時間が経っていたようで、時間を確認すると、あと十分ほどで開始だった。一礼して急いで集合場所へと向かった。

結論から言おう。一時間もせずに式が終わってしまった。部隊長は五分もしゃべらずに壇上から降りた。式の内容はほとんど編制内容の説明だった。ちなみに俺はライトニングらしい。執務官を隊長とした分隊だ。

どうも新人メンバーは今から訓練ということなので俺も便乗して受けるようにと高町一等空尉に告げられた。自室に戻り訓練用の服装に着替えてロビーへと向かう。

背中を預けることとなるメンバーなので、交流を図るべく新人メンバーを探す。ちょうど俺以外が全員集まっており、自分を探していてくれたようだ。

全員揃ったところで、改めて各自自己紹介を始める。

「スターズ3、スバル・ナカジマです。得意なポジションはフロントアタッカーです。宜しくお願いします」

「スターズ4、ティアナ・ランスター。得意なポジションはセンターガードよ」

「ライトニング3、エリオ・モンディアルです。得意なポジションは前衛です。宜しくお願いします！」

「えっと、ライトニング4、キャロル・ルシエです。サポート系の魔法と召還魔法を使っています。それと、この子はフリードです」

「クエ〜」

「最後は俺か。ライトニング5、セツナ・カミヤマだ。一応オールラウンダーだ。どちらかというと近接よりかな」

自己紹介をすませ、軽く雑談を始めようとするが高町一等空尉が現れた。ちょうど今から訓練場へ向かうところだったようだ。

「あ、もう自己紹介とかすませた？」

「はい、名前とコールサイン、得意なポジションは確認を済ませました」

全員を代表してランスターが答える。いち早くこつこつという報告が出来るってことはチームの取りまとめ役を担いそつだ。

「じゃ、訓練場まで一緒に行こうか」

「はい！」

全員で答え、そのまま訓練場へと向かった。

訓練場に到着して、一番初めに思ったのが金のかけすぎ、というところだ。映像の立体化システム自体はずいぶん前から存在するが、ここまで大規模になるとかなりの予算を食う。さすがは本局だ。金の使い方がまちがっている。

しかし、そんなことを表情に出すとまずいので、周りが驚いているのを傍観。本日の訓練は現在六課がかかわることが決定している事件での敵を知ってもらうことだそう。ステージは廃墟、敵は二十体の設定だ。ステージの中央まで移動し、開始の合図を待つ。待つ時間を利用し、作戦を立て始める。

「スバルはフロントアタッカー、そっちのちびっこはガードウィング、で、私がセンターガードでそっちのちびっこと竜がフルバックね。あんたは……」

「一応、実戦経験者なんで前衛と後衛の間でフォローに回るよ」

「大丈夫なんでしょうね？」

「こつこついった荒事は得意な部類だ」

そう言って、デバイスを展開する。バリアジャケットもあるが今回は訓練ということで展開せず、武装のみをとりだす。背中には身

丈に近い長さを持つ大剣に腰には二丁の銃。そう、あのデビルハンターの初期装備だ。

「うわぁ」

「かつこいい」

ライトニングのちびっこコンビは装備に目を輝かせている。スバルは、できた武装に感嘆の声をあげている。

「へえ、あんたもツーンハンドガンナーなのね」

「まあ、命中精度が悪いんで一発の威力を落として数で攻めるタイプだけだな。そっちはセンサーガードなんて自分で言ったんだから、一発一発を確実に当てていくタイプだろ？」

「まあね。じゃ、期待させてもらっわよ、民間協力者さん」

「まかせな」

それぞれ配置につき、開始の合図を待つ。武器をしばらく握っていないかったせいか、訓練だというのに戦意が向上している。

さて、戦闘開始だ。

一話（後書き）

俺、10000PVを超えたら一発ネタを作るんだ

## 一話（前書き）

相変わらず、職場で空いた時間を使い執筆中

## 二話

セツナside

高町一等空尉から、開始の合図が出されそれぞれが動き出す。前衛にはスバルとエリオ、後衛にはティアナとキャロ。前衛と後衛の間に俺という配置だ。そして開始早々、前衛二人が突出する。

「ちよっ……」

二人とも、ものすごい勢いで突撃しているので、中衛である俺との間がどんどん広がる。これではフォローのしようがない。

「ティアナ、二人をフォローできる場所まで移動する。というか、あいつら下からせる。その間少し踏ん張ってくれ！」

「ちよっ、名前で呼ばないでよ！了解、あの馬鹿連れて帰ってきてどうやら名前で呼ぶのはまずかったらしい。今度から気をつけよう。それはさておき、突撃思考の二人を連れ戻すべく、俺も後を追うことにする。」

何とか追いついたと思ったら、スバルのウィングロードが敵の直前で消えビルに吹き飛ぶところだった。

「大丈夫？」

「は、はい」

「この敵はアンチ・マギリング・フィールド、通称AMFが展開されているの。一定レベル以下の魔法は無力化されちゃうよ。みんな、良く考えて倒してみて」

スバルの生成していたウイングロードという魔法は最低でもランクの魔法だ。ということはそれ以上の魔力を込めた攻撃が必要になってくる。銃を構えながらそんなことを考えていると、敵が一体こちらに向かってきた。

「ちっ」

舌打ちをし、銃を乱射する。が、敵に当たる直前にAMFでかき消される。

「おいおい、まじかよ。スバル、エリオ。お前ら突出しすぎだ！ いったん下がれ！ 作戦の練り直しだ」

「わ、わかった」

「はい！」

弾幕を張りながら、バックステップで後退し前衛二人を引き連れて一度後退した。といつても、後衛組との間を詰めただけで根本的な解決にはなっていない。全員へ念話を使い作戦をたてなおすことにした。が、ほとんど俺とランスターの相談になってしまった。

「さっきBランククラスの魔力弾連射したわけだが、AMFに阻まれた。これでBランク以下は無効ってことが判明したわけだ。で、攻略法としては複数ある。動力源がなにか分からないが、あれらのエネルギーが切れるまで行動させる」



「現実的じゃないわね。長時間エネルギー切れが起こらなかつたら先にこっちが参るわよ。単純に高出力の魔力で貫いた方が早いわね。瞬間的な威力ならスバルが一番あるわ」

「じゃ、スバルは相手に近づいて高威力の魔法で敵を倒してくれ。ただ、さっきみたいにあんまり突出するなよ。フォーローがでкин」

「うん、分かった」

勢いよく返事をしたスバルだが、ちゃんと分かっているかどうか怪しいところだ。どうも突撃思考のようなので心配である。

「で、次の攻略法としては物理衝撃を与えることかな」

「物理衝撃、ですか？」

攻略法にエリオが疑問に思ったのか質問をしてくる。他の面々もにたような表情だが、ランスターだけが少し考え込んでいた。

「なるほど。本体から少し離れたところであんたの弾が消えたんだったんわね」

「ああ」

「ということ、あくまでAMFが発動されるのは魔法のみと考えるもいい。魔法がダメなら直接本体に衝撃を与えた方がいいってことね」

さすが指揮官適正が高そうな人物だ。少ない情報でよくここまで

考えたものだ。ちなみに物理衝撃は俺の考えと同一だ。戦闘経験なしでこれなら、この子将来化けるんじゃない？

「あとは多重弾核による射撃とかだな。一層目でフィールド中和で二層目で貫通。ものすごい疲れるし、俺はできんが。他に誰か方法ある？」

「あの、私無機物召還ができるのでそれで敵を捕縛するっていうのは……？」

キャロが控えめに聞いてくる。確かに、無機物ならAMFの干渉は受け付けないはずだ。それも有りかもしれない。

「ん、じゃ、やってみてもらっていいかな？」

「は、はい！」

「じゃあ、私は多重弾核をやるわ。ガンナーが弾が当たりませんかから作戦に参加できませんでした、じゃ面目丸つぶれよ。エリオは周囲のビルの一部を壊して敵を押しつぶす形で行きましょう。さすがに正面からだとかパワー負けしそうですしね」

「わかりました。でもどうやってひきつけるんですか？」

「それは俺がやるわ。さすがに何もせずにいるのは忍びないのでな。ついでにこつちも倒せそうな手段があるんでそれをやってみる」

「作戦会議終了ね。とりあえず、前衛が取りこぼしたのを私たち後衛が倒すわ。スバル、また突っ走らないでよ」

「わかってるよ〜」

作戦会議は終了。これから、新人五人の猛反撃を始めよう。

なのはSide

「作戦会議は終わったみたいだね」

前に出すぎたスバルとエリオをセツナ君が連れて一旦下がって、そのあと作戦会議を始めたみたいだ。新人メンバーがどう対応するのか楽しみなので、会議が終わるまでガジエットの動きを緩めてみた。

そして、つい先程作戦会議が終わったようだ。布陣を見ると、中衛にいたセツナ君はどうやら前衛に加わったようだ。ガジエットが五機ほど前衛に向かって行く。それをスバルが突出し、デイバインバスターで撃ち貫く。まずは一機撃破。しかし、他のガジエットは後ろにいたセツナ君とエリオの方へと向かう。そのガジエットをセツナ君が射撃で牽制し注意をひきつける。そして、エリオはビルの上へと移動した。ガジエットは攻撃してきた敵、もしくは一番近くの敵に攻撃するようにされている。なので残っていたガジエットは全てセツナ君の方に注意が向いている。

「エリオ！やれー！」

「はい！」

エリオがビルを壊し、その瓦礫がガジエットが集まっていたところへと落下する。うん、なかなかいい判断だ。でも、下手すればセツナ君も巻き込まれていたからそこは減点かな。

後衛の様子を見てみるとキャロが無機物召還で呼びだした鎖でガジェットを縛っている。ティアナは多重弾核での射撃で連続して敵を撃ち抜いていた。その魔法のランクはAAランクのスキルだ。消耗が激しいみたいだけど、ついこの間Bランク試験に受かったとは思えない魔法だ。これからの訓練で間違いなく伸びる。

前衛組の様子を再び見てみると、スバルは近接でエリオは周りの障害物を利用し上手く捌いている。しかし、セツナ君の様子が見当たらなかった。それで彼にモニターを合わせた。そこで私は、信じられないものを見た。

セツナside

みんな順調に敵を倒しているようだ。ランスターとか宣言通りに多重弾核を使っていた。どんだけスペック高いんだ、お前。これならあとは何もしないでよさそうだと思うていたが、そうは問屋が卸さなかつたらしい。気づけば周りを三機の敵が囲んでいた。

「あー、あいつらには黙っていたが、お前らの攻略法ならとつくに把握済みだ。というわけでそれなりに本気でやらせてもらうぜ」

実は、中將の依頼を受ける前に一度だけこの敵との交戦経験がある。AMFには度肝を抜かれたが、そこは他の依頼で培った能力で対処させて頂いた。初戦というのもあるが、余りにも勝ち方がお粗末だったため、戦闘データを検証し対処法を考案した。訓練なのでめったなことでは死ぬことがないので色々試すにはいい機会だ。

銃をホルスターに収め、背中の大剣を握る。

「さて、一曲お付き合いただけるか？」

敵の一騎が触手のようなコードを伸ばし、こちらに攻撃を仕掛けてくるがそれを避け至近距離まで近づく。そして、剣を突き出し貫通させる。そのまま剣を引き抜き、攻撃を仕掛けてこようとしたり敵を縦に切る。切り終えたと同時に少し離れていた敵へ突進してまた突きを繰り出す。そのまま、敵は沈黙した。

この敵のAMFが展開されるのは表面から三十センチほどの距離からだ。なので、魔力で武器を強化しているとAMFにはじかれてしまう。かといって、肉体の強化魔法だけで対処しようとしても、人間が打ち出す力というのは限られている。もちろん、それも考えられて設計されているはずなので、普通の物理攻撃では意味がない。先ほどのエリオのように上から瓦礫をぶつけるとなると別だが。

では、どうやって敵を倒したかという話だが、単純な話だ。AMFの効果がない、内側三十センチに武器が到達した時点で魔力を展開させて攻撃をする。

口で言うのは簡単だが、実際にやろうとすると難しい。魔力の展開が速すぎるとAMFで阻まれ、遅すぎると装甲にはじかれる。絶対的なタイミングが合わさったからこそ先ほどのような芸当が出来たのだ。

俺が倒したことでどうやら、すべてのターゲットが破壊できたようだ。高町一等空尉から集合がかかり、本日の訓練はこれで終了だそう。明日から早朝訓練を始めるので今日はしっかり休むこととすることだ。

早朝訓練、起きれるだろうか……。

## 二話（後書き）

この分量をよく毎日書いてるな と思う。しばらく経ったら週一ぐらいになるかも。

初訓練を終えて、セツナの新人メンバーの感想

スバル：高威力突撃娘。後ろのことを考えましょう。

ティアナ：BランクなのにAAランクの技とありえねえ。状況把握能力も高いので、実戦を重ねると化けるに違いない。一番的にまわしたくない。

エリオ：他人に流されやすい。もうちょっと自分で考えて行動しよう。

キャロ：召還魔法はよくわからないが、魔力をまとわない攻撃を自在に操るのはなかなか恐ろしい。

大体こんな感じですよ。

次回、初出動DA！

### 三話（前書き）

毎日大体6〜7kbの容量で書いてます。  
いつまで続くのやら



### 三話

最初の訓練からしばらくの時間が経った。新人四人は高町一等空尉指導による訓練を行っている。そして、俺の方はというと。

「訓練中によそ見をするとは、私の剣はそれほど遅いか。ならばもう少しだけ本気を出そう。なに、訓練だ。怪我はしても死ぬことはあるまい」

目の前には騎士甲冑まで展開したシグナムさんがいた。こうなった経緯としては、初訓練でガジェットを撃墜したところをしつかりと見られていたらしい。対ガジェット戦に関しては下地が出来上がっているので、対人戦を訓練してみようということになったのだ。そこで名乗りを上げたのが、六課のバトルマニアであるシグナムさんだった。剣だけの勝負だったら、多少こちらが押されてはいたが、いい勝負が出来た。が、魔力有りの訓練だと完全に負け越す。いくらなんでもBランク魔導師相手にAランク魔法の連発はひどい。なんでもリインフォース？曹長とユニゾンもできるとか。それを本人から聞いた時「何それ、怖い」と思わず言ってしまった、ボコられた。

訓練内容についてだが、単純な戦闘訓練、ひたすらシグナムさんの攻撃を避ける訓練、シグナムさんに一撃当てる訓練をローテーションを組んでやっている。そして、週一の間隔で新人メンバーと一緒に対ガジェット戦の訓練を行う形だ。最近では新人メンバーも対ガジェット戦に慣れてき、通常の魔力攻撃で倒せるようになってきた。注目していたティアナ（名前で呼ぶ許可をもらった）に関しては多重弾核を二十発ほど撃てるようになっていた。本人いわく、コツをつかんだら意外と簡単に生成できるようになったらしい。将来

が怖すぎる。

そんなことはさておき、本日行っている訓練はひたすらシグナムさんの攻撃を避ける訓練だ。防御は有りだが、五発防御したらこちらの負けだ。一定時間その訓練を行い、データを見て二人で検証。その検証を元にまた訓練、という形で行っている。他の訓練も似たようなサイクルで行っている。

「あぶねえ!？」

新人メンバーのことを考えていたら、シグナムさんに斬られそうになる。ぎりぎりでかわし、距離をとる。午前の訓練が終わるまであと一分。それまでに逃げ切れれば一応俺の勝ちだ。と思っていたら、意外なところで終了の合図がきた。

「ふむ、少し早いが午前の訓練は終わりだ。スバルとティアナのデバイスの調子がおかしいようなので向こうは早めに切り上げたらしい。こちらもそれに伴って訓練終了だ。しかし、残念だ。仕留めきれなかった」

ものすごく残念そうなシグナムさん。明日の訓練が怖いです。

集合場所について、エリオにどんな不具合がでたのかを聞いてみると、ティアナのアンカーガンは弾詰まりを起こし、スバルのローブレードは煙を吹いたらしい。ティアナのデバイスは割かし古そうなので老朽化が原因の弾詰まりだろう。スバルのローブレードは使い過ぎだな。

「みんな、今のデバイスじゃ辛くなってきたみたいだし、そろそろ

新しいデバイスが必要かな。つとということで、昼一番にみんなに新しいデバイスをプレゼントします。昼食を食べ終わったらメンテナンスルームに集合ね」

「はい！」

全員で返事をする。俺には関係ないと思っていたが、どうやら俺にもなにか用事があるようで俺もメンテナンスルームへと呼ばれた。

デバイス不調のメンバーが二人もいるので、午前の訓練はこれで終了し少し早目の昼食となった。

食堂では、俺達五人一緒に取ることにしている。最初は開いた口がふさがらなかったスバルとエリオの食べる量も今では見慣れたものである。

食堂のモニターをみると、地上本部の演説風景が映しだされていた。

『我々地上本部は、ミッドチルダの平和を第一に考えている。最近では犯罪発生率も少しではあるが、減少傾向にある。だが、その減少数も微々たるものである。人材不足ということは否定はしない。ゆえに全ての事件を短期で解決することも難しい。魔導師が足りない現在、一時期本来禁止されている質量兵器の導入も考えた』

「ぶっ」

演説を横目で見ていた俺は思わず噴き出した。いや、地上トップのあんたがそれを公言しちやまずいだろ。だが、そんな俺の気持ち

も露知らず、彼の演説は続けられた。

『しかし、われらがそのようなものを所持してしまえばいずれは腐敗し、一方的な虐殺を広げないともかぎらない。極論ではあるが、今後このようなことがないとも言いきれない。では、どうすればいいのか。魔導師がかかわっていない事件に関しては即時に対応し、解決できている。しかしながら、魔導師がかかわると即時に動けるものはすくないという問題を抱えている。だが、その問題を解決できる方法を私たちは見つけた』

食堂にいた全員がモニターに目を向ける。そりゃそうだ。魔力を持っているだけで一定以上の出世ができ、ランクが上がれば上がるほど出世街道まっしぐらな管理局だ。それを覆すようなことを発言したのだから全員が目を向けるのは当然だ。

『しかしながら、その技術は実用できる段階ではない。だが、将来必ずや我らの平和の為に役だってくれるだろう。私は、この技術を使い、より一層ミッドチルダの平和の為に尽力を尽くすことを改めてここに宣言する！』

モニターからは多くの拍手が聞こえる。ちなみに六課の食堂の雰囲気はものすごく微妙である。本局と地上の仲の悪さは公然の秘密扱いなので、これがきっかけで争いにならないかどうかの心配が大多数みたいだが。

そんな空気のなか、普通に昼食を食べていたスバルはさすがだと思っ。

そんなこんなで新型デバイスの受け渡しが始まった。スバルは

アームドデバイスはそのまま、ローラーブレードの方をデバイス化したようだ。強度も段違いに上がっており、彼女の無茶にも耐えられるという。

ティアナは銃型のデバイスを受け取っていた。展開した時は一丁だったが、状況によって二丁にもできるそうだ。元々ツーハンドガンナーだったので、そのあたりは問題ないようだ。

エリオとキャロのデバイスは姿形こそは変わらなかったが、性能が以前より上昇したそうだ。

シャーリーの話によると、現状では扱いきれないスペックを誇っているので、みんなの成長具合を見て、徐々に制限をなくしていくそうだ。ちなみに、全てインテリジェンス型のデバイスだった。それ以前に、マスターが扱いきれないデバイスを作るのもどうかと思う。

「で、セツナさんと呼んだ理由なんですけど、差出人不明の荷物が届いていたんです。商品名がデバイス、となっていたので心当たりがあるかな、と」

シャーリーが渡してくれたのは少し細長い箱だった。確かに品名部分にデバイスと書いてある。差出人に心当たりがあるので迷わず開封する。その中から現れたのは、ショットガンだった。

「質量兵器!?!」

俺が取りだしたショットガンを見て全員が驚く。そりゃ、見間違っくらいまごうことなきショットガンだから仕方がない。

「いえ、これは魔力弾をショットガンのように打ち出すデバイスですよ。ここに来る前に俺のデバイスの開発者にオーバーホールを頼んだんですが、間に合わないのがいくつかあって終了次第送ってくれるように頼んだんですよ」

「そっか。でも、いくつもデバイスを持ってて大丈夫なの？」

「何でも屋なんてやってると荒事に巻き込まれやすいですからね、近接だけ得意、遠距離だけ得意じゃ、やっていけませんから」

苦笑しながらこたえる。

本来デバイスというものは展開すると常時魔力を送らなければならぬ。理由としては瞬時に魔法を発動させるためだ。が、俺のデバイスは魔力を送るのは使用するときのみだ。魔力総量からいって大規模な魔法は使えない。なので、一つの機能に特化した武器を複数持つことで、あらゆる状況に対応できるようにした。ちなみに、一つのデバイスにつき、登録されている魔法は一個しか存在しない。その単純な構造ゆえに、詠唱なしに魔力を送って発動させるという二つのプロセスで攻撃に移ることが可能だ。処理自体も単純なので一瞬で終わりすぐさま稼働できるとというのが利点だ。

「じゃあ、昼からの訓練は新しいデバイスを使って慣らしをしてみようか」

そう高町一等空尉が言い終わると同時に基地内にアラートが鳴り響く。すぐさま、近くのモニターが切り替わり、輸送列車の周りに大量のガジェットが張り付いている映像が表示された。どうやら、輸送列車が襲われているらしい。

「皆、訓練なしのいきなりの実践だけどいけるね？」

「はい！」

「機動六課、出勤！」

機動六課初出撃は輸送列車の奪還となった。さて、うまくこなせるといいんだがね。

### 三話（後書き）

次回、新しいオリキャラ登場。モチーフはあの人です（わかるか



## 四話（前書き）

この作品のティアナが原作より強化されている件。ティアナが好き  
なんで気持ち優遇しているだけですが（あ  
今回、セツナが使っている武器の名前が一部判明

## 四話

ヴァイスが操縦するヘリに乗り込み、現場へと向かう。フェイト執務官は別件で外にでていたため、飛行魔法で現場まで飛びあとで合流すること。前衛に出張つてくると思われたシグナムさんはまさかの後方。あなた、副隊長だろう。あと、ヴィータ副隊長も後方だった。初陣で二小隊合わせて欠員二名とか、これはひどい。

間もなく現場に到着するらしいが、周囲を見渡してみるとキャロが少しおびえている。たしかに、今回は訓練ではなく実戦だ。けがをすることもあれば死ぬこともあるかもしれない。しかも、彼女は十歳前後の子供だ。しっかりしろという方が酷だろう。しかし、エリオは適度な緊張ぐらいしかしていなかった。ティアナとスバルにしても、そこまで緊張はしていないようだ。

キャロに一声かけようかと思っていたら、高町一等空尉が話しかけていた。その話を聞いてキャロに元気がでたので良しとしよう。

「じゃ、私は先に行って空にいる敵を防いでくるね」

と告げて、ヘリから飛び降り空中でバリアジャケット展開。そのまま航空戦力の方へ向って飛んで行ってしまった。空中でバリアジャケット展開とかそんな度胸は俺にはない。

輸送列車に追いつくまでもう少しあるので、設置されたモニターでフェイト執務官と合流した高町一等空尉の姿をみる。二人の射撃魔法で面白いぐらい次々とガジェットが落ちていく。俺達要らなくね？

「お前ら、なのはさんが安全にお前らを降りられるようにしてくれ  
たんだ。気合い入れていけよ！」

「はい！」

ヴァイスの声に全員が反応する。俺はついつられて反応してしま  
ったが、現状ではモチベーションがダダ下がりなのは否めない。

「よし、スターズ3、4まずはお前らからだ！」

「はい！」

「了解」

スターズの二人組は順番に飛び降り、空中でバリアジャケットを  
展開する。いや、本当に度胸あるわ。

「次、ライトニング3から5！」

「はい！」

「は、はい！」

「ラジャ」

エリオがキャラロの手を握って一緒に落ちながらバリアジャケット  
展開する。流れるに俺もバリアジャケットを空中で展開させなけれ  
ばならないのだから、そんな空気を無視し、ヘリの中でバリアジ  
ャケットを展開する。

格好としては、一作目の Devil May Cry のダンテの衣裳を赤ではなく黒にした感じだ。ただし、コートはノーズリーブコートである。

「お前さん、流れる的にここは飛び降りてから展開だろ！」

「いろいろ事情が有るんだよ！ライトニング5、行くぞ！」

正直なところ、飛び降りながらバリアジャケットを展開する勇気がなかっただけです。根っからの地上戦専門の魔導師なんですよ、俺は。

そのままへりから飛び降りエリオとキャロの近くへ着地する。すぐさま、腰の後ろのホルスターにあるハンドガンを持ち、二人に状況を尋ねる。

「状況は？」

「今、リン曹長からバリアジャケットの説明と作戦の簡単な説明を。僕たちはこのまま中央の車両を目指していけばいいそうです。スバルさんとティアナさんたちも反対の端から中央を目指しているそうです」

「それで、どちらかが先に着いた方がレリックを確保することになっています」

「了解。で、列車はどうやって止めるんだ？」

二人して、あっといふ表情をする。そんな会話をしていると、リ

イン曹長から通信が入ってきた。

「列車の方は今私がアクセスしているです。ただ、そちら側に大きな魔力反応があつて妨害を受けています。まずはその対象の破壊をお願いします」

そう言つてマップに魔力反応がある箇所が表示される。現在の地点から四両程先に進んだところだ。

「了解。ライトニングチーム、これより作戦行動に入る」

エリオとキャロに目配せをし、前の車両へと進んでいく。が、列車の中から屋根を突き破つて大量のガジェットが出てくる。およそ二十体程だろう。だが、こいつらにかまっている暇はない。

「一気に抜けるぞ、二人とも！」

「はい！」

進路上にいる敵だけを破壊することにする。

「アイリス、ガンセレクト。ショットガン」

「了解」

先程まで持っていたハンドガンが格納され、右手にはショットガンが握られている。

「さて、行きますか！」

右手を前に突き出し突進する。ショットガンとガジェットが接触するが金属がぶつかつた音しかしない。だが、距離はゼロ距離。そのまま引き金を引きガジェットを吹き飛ばす。ショットガンのほうは異常はない。さすが俺の突きに耐えられるように極限まで硬くしたショットガンだ。

エリオとキャロも協力し合つて敵を倒している。進路上の敵だけを倒すつもりが次々と邪魔をしてくるので結局全部を倒すことになつてしまった。ちびっこ二人は魔力はまだ余裕が有りそうだが体力、特にエリオは消耗している。だが、戦えないわけではなさそうだ。俺の方は体力は大丈夫だが魔力を半分ほど消費した。こちらも戦えないわけではないので問題はないだろう。増援が来なければ、の話だ。

リン曹長に連絡を取つてみると、スターズの方はひっきりなしにガジェットがやってきて、なかなか突破できないようだ。確認が取り終わると同時に列車のコントロールを奪っているであろう敵がこれまた列車の屋根を突き破つて出現した。直径三メートルほどの丸い球体のガジェットだ。どうやら新型らしい。

「まず俺が仕掛けて様子を」

見ると言いかけるが、別方向から明らかに俺をめがけて攻撃が仕掛けられる。

「!?!」

回避は間に合わないため、剣を抜き攻撃を受け止める。衝撃はきだが、そこまでダメージはない。攻撃方向をみると、そこには黒いボディスーツを着た女性がいた。踵部分には銃が装着されてお

り、さらに両手にも銃を持っている。間違いない、彼女の戦闘スタイルの元は確実にあの人物だ。

「ベヨネッタ……?」

「あら、やっぱり知ってたのね」

俺のつぶやきに女性が反応する。もう仮称でベヨネッタにしておこう。俺の発言を肯定するということは、彼女の戦闘スタイルはゲームのベヨネッタとおそらくおなじだろう。そこまで考えて、エリオとキャラ口に声をかける。

「エリオ、キャラ口。お前たち二人であるのデカ物相手に出来るか?」

「はい!」

「やって見せます」

「いい返事だ。あのお客さんはどうやら俺に用事があるみたいだからな」

素晴らしい終わると、俺は改めて現れた女性の方を向く。エリオとキャラ口は新型のガジェットのほうへと向かう。彼女は最初から視界に入っていなかったかのようにその場を去った二人を無視していた。

「しかし、あんたのような美人と会ったことはないはずなんだがな。どこかで会ったことがあるか?」

「いいえ、私が一方的に知ってるだけよ。本当なら貴方に届け物をするだけだったんだけど、興に乗ったから仕掛けてみたの。という

ことで、お相手をお願いできるかしら？」

「逃がす気が無いくせによく言っぜ」

剣を構えなおし相手と対峙する。そして、お互いが一斉に動き出す。剣を振り下ろすが、銃を交差して受け止められる。そして、蹴りを放ってくるが上体をそらして避ける。脚自体は避けることが出来たが、踵に設置されている銃から出る魔力弾がほほを掠める。後方にとび、距離を取る。両手の攻撃はともかく、あの踵の方は厄介だな。対策を練っていると後ろから声上がる。

「エリオ君！」

後ろを見ると、エリオが敵に吹き飛ばされたのか列車から落ちていく。

「エリオ！」

すぐに向かおうとする、相手がそれを許すはずも無く両手の銃から連続してこちらに攻撃を仕掛ける。

「余所見をするなんて余裕ね。まったく、彼がなんで貴方なんかを気にかけるのかわからないわ」

「ちっ……。アイリス、リベリオンカートリッジロード。スタイルセレクト、ソードマスター」

「了解しました。スタイルチェンジ、ソードマスター」

剣の柄上部にある髑髏の装飾の口の部分から薬莖が吐き出される。



近接戦がしやすいように、身体能力強化に多くの魔力を割り当てる。

「悪いが速攻で片付けさせて貰うぞ……。ステインガー！」

右手を突き出しあ相手に向かって跳躍する。だが、その突きはいつもよりスピードが速くより鋭くなっている。相手は銃を交差させ、その突きを受け止め突進が一旦止まる。だが、その体制のままさらに相手に向かい突進をする。その勢いに押され、相手の防御が崩れそのまま攻撃が直撃する。非殺傷設定なので物理衝撃と魔力ダメージだがかなりの威力だ。おそらくしばらくは行動できないだろう。

「やっぱり貴方相手にこの武装は厳しかったわね。まあ、いいわ。本来の目的は果たしたし」

しばらく動けないと思っていたが、相手は何も無かったかのように立ち上がる。

「はい、これ」

何かを投げて渡してくる。それは、中心に円状のものがあり、それと三本の鉄の棒が鎖でつながっている。俺がオーバーホールを頼んでいた武器の一つ、ケルベロスだ。

「とりあえず、楽しかったわ。じゃーねー」

そう告げると、魔法陣を展開してその場から転移した。

「エリオは!？」

急いで後ろを振り返ってみるがそこには、敵を真っ二つに切っ

いる最中のエリオだった。上空を見上げると、キャロがでかいドラゴンに乗っている。そんなドラゴンどこにいたのだろうか。

結果として、エリオとキャロが新型のガジェットを破壊し、コントロールを奪還。スバルとティアナが捕獲対象であるレリックを確保し、この事件は幕を閉じた。しかし、俺が戦闘した女性はエリオとキャロ以外姿を見ていなかったそうだ。

「一体何者なんだ……」

一つの謎を残したまま、俺は六課へ戻ることとなった。

#### 某研究施設

「ドクター、戻ったわよ」

先ほどセツナと戦闘をしていた女性が薄暗い部屋に居る白衣を着た男性に話しかける。

「ああ、ちゃんと彼にアレを渡してくれたかね？」

「ええ、ついでにちょっと遊んできたわ」

「それは結構。君のデバイスのほうはどうかね？」

「もうちょっと調整が必要ね。弾の発射タイミングが遅くて避けられたわ」

「ふむ、あとで調整しておこう」

「それにしても、彼のどこがいいのかわからないわね」

「なに、彼とともにすごして見ればそれもわかるさ。さて、私は再び研究に戻るとしよう来るべき日のためにね」

そういつて、男は部屋のさらに奥へと向かっていった。

この男とセツナの邂逅はまだ先である。

#### 四話（後書き）

話によるとデビルメイクライとベヨネッタの世界観はリンクしているそうです。それなら出しても違和感ねえな と思ったので出してみました。

このキャラの名前が決定していないので募集とかして見る。

案はあるけど、よりしっくり来るものがあれば募集の中から選びます。

それはそうと一万PV&二千ユニーク達成しました。皆様に感謝いたします。

五話（前書き）

今回は短め

## 五話

輸送列車襲撃事件からしばらくの時間が経った。あの後、新人メンバーの訓練は第二段階へ移行し個人スキルの向上訓練を行っている。俺の方は戦闘スタイルが確立しているため、相変わらずのシグナムさんとの模擬戦だ。

それはさておき、事件の経緯を俺はベヨネッタもどきと戦っていたので把握していないためデータを見せてもらった。高町一等空尉は落ちているエリオとキャロを助けに行こうとしたフェイト執務官を止めていた、ということが分かった。フリード本来の姿を知っていたとはいえ、あれはないだろ。この場合、空に上がってばかりで地上のことを気にしなかった隊長陣の落ち度だ。フェイト執務官は、あの二人の保護責任者だから親心というものがあつての行動だろうが、分隊長としてもフォローするという心構えは立派なものだ。今回の一軒で、高町一等空尉の個人的評価が格段に下がったのは言うまでもない。

さて、非番待機などという休みは存在するが本格的な休みは今のところこの六課では存在していない。どれだけ六課メンバーはワーカーホリックなんだ。

そんな六課メンバーには悪いが、俺は二日ほど休みをもらって一種の里帰りをしようとしているからだ。訓練に関する報告書を書きあげ、自室へ準備に向かおうとしていると、シグナムさんから呼びとめられた。

「少しいいか？」

「はい？」

「地球に帰るのだったな。帰る地名を教えてくださいてもいいだろうか」

「海鳴ですね。実家は隣の市なんですが、用が有るのは海鳴の方なので」

「ふむ」

俺の言葉を聞くと、シグナムさんが考え込む。そして、何かを決意したようにこちらに向き直った。

「新人にはまだ言っていないのだが、海鳴にロストログアが確認されてな。その回収を土地勘のある我々に任務が回ってきた。隊長陣は元々海鳴出身なのでな。もしおまえが大丈夫ならその任務の期間に休暇をずらして一緒に行かないか？」

別段、約束が有ったわけでもなかったので承諾してしまった。今思えば、これが今回の事件の俺の失敗だったのかもしれない。

さて、やってきました海鳴市。副隊長二人は居残りらしい。来たのは隊長陣三人と新人四人と俺だ。夕食だけ一緒に取ることにし、俺は目的の場所へと向かうことにした。

俺の向かった先は海鳴大学病院。その敷地内の特別病棟といわれるところである。受付で診察カードを提出し、しばらく待つ。特別病棟なためか、それほど待つことなく診察室へ通された。

「お久しぶりです、フィリス先生」

「お久しぶりですね、セツナさん。以前来た時よりだいぶ期間が空いていますよ。ちゃんとしつかり定期的に来て下さいね」

フィリス・矢沢先生。ある病気に関しての専門家であり、自身もその病気を持っている。  
病気といっても感染するものではなく先天的なものである。

通称HGS。先天性遺伝子障害と呼ばれ、数十年前に発見された割かし新しい病気だ。致死性はないものではあるが、発症者は異常な能力を身につけることが有る。俗にいう超能力が発現するのだ。ちなみに、俺も発現していたりする。最初の頃はこの能力を恨んだりしたが、この能力と折り合いをつけて生きていくと決めてからは気に入るようになった。

フィリス先生と軽く問診を行い、身体全体を専用の機械でスキヤンし、結果を待つ。

診断結果を持ったフィリス先生が待合室にやってきた。表情をみると微妙に怒っていらっしやる。

「えーっと」

「両足、右腕、右肩。何か言い訳は？」

「すみませんでした」

半ばやっぱりと思いつつすぐさま謝る。今言われた箇所は前回の



戦闘で負荷がかかったところだ。最近微妙に調子がおかしいと思っ  
ていたがやはり色々と痛んでいるらしい。一回目の突進だけならこ  
こまで言われなかったが、二回目の突進での負荷が高かったからな  
「ということ、今からマッサージしますね」

フィリス先生のマッサージ。このマッサージを受けた者は必ず悲  
鳴を上げるという。正直、この人のマッサージ痛いんです。でも効  
果は折り紙付きなので、そこまで強く文句を言えない。

そんなことを考えても現実はやってくる。

「ぎゃーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！」

マッサージを終えた後は少し痛んでいた関節が軽くなっていたこ  
とを追記しておく。

病院を出るころには夕方になっており、さすがに今から合流は難  
しいと思い、夕食は一人で食べることを伝えた。が、通信した時に  
既に向こうは夕食タイムが始まっておりスバル・エリオの二人によ  
って食べ物が蹂躪されているようだ。現実是非常である。一人さみ  
しく某牛丼店で牛丼二杯を食べてさみしさを紛らわした。

食い終わり、今度こそ合流しようとしたところ、スーパー銭湯に  
行くので現地集合とのこと。連絡を受けた箇所がその場所から徒歩  
数分の場所だったのだが、銭湯セットの購入のため、いったんその  
場から離れてコンビニで下着等を購入した。銭湯内にも売っている  
ことを知った時は思わず涙を流しそうだった。

入口付近で女性陣に拉致られようとしているエリオを救出。しかし、ティアナさんや。年頃の女の子が「女性の裸なんてそのぐらいの年じゃないと合法的に見れないんだから」とか言うのはどうかと思っんだ。

エリオに銭湯でのマナーを教えつつ、二人でゆっくりと入浴する。

「そういえば、何処に行つてたんですか？」

まったりとしていたが、静かなのに耐えられなかったのかエリオがこんなことを聞いてきた。

「ああ、ちと病院にな。ミッドじゃ取り扱ってない病気持ちなんでこっちでいただいた一、二カ月ごとに見てもらってるんだ」

「だ、大丈夫なんですか？」

病氣と聞いてエリオが過剰に反応する。まあ、一緒に戦ってる人物が秒気持ちだと聞いたらそりゃ驚くだろう。

「安心しろ。命に別条は全くない。まあ、この病氣も特殊なんで病氣が向いたら詳細を教えてやる」

エリオの頭を乱暴に撫でて再び湯船に肩までつかる。そして、しばらく時間が過ぎた。そして何を思ったかキヤロが男湯に突撃してきた。ロリコン扱いされてはたまらんと思いエリオをいけにえにし、二人に子供用露天風呂に行くように促し俺は一人で銭湯を楽しんだ。

無事、銭湯を堪能することが出来た。しばらく休んでいると女性

陣も上がってきたので、初対面の人たちに軽く挨拶をする。クロノ・ハラオウン提督の奥さんとフェイト執務官の使い魔のアルフさん、高町一等空尉の親友であるバニングスさんに月村さん、さらにお姉さんの美由紀さんがいた。簡単に挨拶を終えたところで、町にばら撒いたサーチャーが反応。本体のコピーが大量発生してるため、俺にも手伝って欲しいとのことだった。ひたすらエボニー&アイボニーを連射して数を減らす作業に参加していたわけだが、最終的には新人メンバーが確保。キャラが封印処置を一人で行ってロストログアの改修任務は終了した。

無事終了したことに皆喜んでいるが、ティアナだけは浮かない顔をしていた。それに周りが気づいた様子は無い。近いうちティアナには話を聞いてみよう。

そんなこんなで、六課メンバーは夜のうちに帰ってしまった。俺のほうはホテルの予約と明日にはもう一度病院に顔を出すことになっているので一日送れて帰還することとなった。

こうして、海鳴を舞台にしたロストログアの回収任務は終了した。

## 五話（後書き）

原作とら八を知っている人には多少なじみのある人物と設定です。そしてこのHGSはフラグです。何のフラグかは秘密ですが

## 六話（前書き）

今回も短め

いつの間にから20000PV&35000ユニーク突破

皆様に感謝です。

## 六話

無事、海鳴大学病院での能力検査を終えて六課に帰還した。エリオが口を滑らせたのか、俺が病氣持ちで有ることが全員に知れ渡ってしまった。シグナムさんに限って言えば、「お前との訓練は心躍るものがあるが、無理をされても困る。無理だと思ったなら申し出てくれ」といわれる始末。

致死性皆無の病氣なんだがな。どうも、間違っただけで伝わったようだ。エリオ、伝えるのはいいがちゃんと致死性がないことも話そうな。

微妙に気まずい雰囲気でごす中、次の任務が決まった。あるオークションにレリックが出品されるといふ情報を掴んだらしい。で、その警備にかりだされることとなったわけだが、隊長陣が全員中の警備らしい。お前ら部隊放棄にも程が有るだろう。さらにオークションに着ていくドレスを運用費で購入したらしい。頭が痛くなってくる。もう、自分の店に戻ろうかな。でも、中将との約束があるので離れられない。

それはさておき、病氣のことが知れ渡ったせいで実戦訓練より事務仕事の方がおおくなってきた。戦闘要員である俺達の席というのは決まっておらず、同スペックのコンピューターのどれかを使うことになっている。この場所にいる時間が長くなっただせいか、俺の場所は固定化してきた。

そして、今日もいつものごとく書類を書いていたのだが、訓練が終わったのか新人メンバーがやってきた。ティアナが他の三人に断りを入れ、こちらにやってきた。

「ちょっといい？」

「ん？何だ」

「相談が有るんだけど今晚大丈夫かしら？」

近いうちに一度話そうと思っていたが、まさか向こうから話を持ちかけてくるとは思わなかった。ちょうどこちらも話が有ったので快諾する。

「ああ、分かった」

そんなこんなで夜になる。ティアナが待ち合わせ場所に指定してきた場所は海岸だった。約束の時間の十分ほど前に着くようにきたが、ティアナの方は既に来ていた。今晚は少し冷えるので、ホットのコーヒーを道中に有った自販機で二つ購入する。

「待たせたみたいだな」

「そこまで待つてないわ」

缶コーヒーを渡して、ティアナの隣に腰を下ろす。

「で、改まって相談ってのはなんだ？」

「私、ここにいる意味が有るのかな、って思ってね」

「とこひとて」

「スバルはあんな風に見えて才能はある。それは誰よりも一緒にパートナーを組んできた私が分かってる。それに、エリオやキャロもあの年齢で私と同じBランク魔導師。あんたはあんたで豊富な実戦経験があつて私たちより一足先に個人演習に入ってる。嫉妬っていうのは分かっているんだけどね、それでも他に比べて見劣りしちゃうから私つてここに意味が有るのになつて考え込んでしまったのよ。スバルにはこんなこと相談できないし、ちびっこ二人にも言えない。消去法であんたに相談しようと思つたわけ」

「ようは、周りがすごすぎて気おくれしてるわけか。高町一等空尉には相談しないのか？」

このあたりの相談なら、俺より高町一等空尉のほうがいいんじゃないかと思ひ、聞いてみる。

「それこそ無理な相談よ。あの人自体才能の塊なんだから、相談している最中に絶対耐えきれずに怒鳴り散らすわね。それに、なんか話しかけ辛いよ。壁が有るっていうか、あくまで生徒と先生の間柄です、つてのがひしひしと伝わってくるのよね」

確かに、隊長陣と新人メンバーには一応部外者な俺から見ても壁が有る。というか、隊長陣の仲が良すぎて入り込む隙がない。正直、仲良しごっこをするなら別のところでやれといたい。

「数年前、私の兄さんは任務中に殉職したわ。別にそれだけなら有る程度小さいながらも覚悟はしていたわ。でも、上司の人に兄さんは犯罪者一人捕まえられなかった役立たずとののしられた。だから私はそいつらに兄さんの夢だった執務官になつて見返してやりたいとおもつてる。で、実際現場に入ってみると、私より才能のある奴



ばかりで自信無くしてきちゃったのよ」

「で、消去法とはいえ、Bランク魔導師として戦っている俺に相談  
つてわけか」

「ええ。一応、あんたのスタイルの一つが私とほとんど同じだから  
私が強くなるにはどうすればいいのかアドバイスをもらいたかった  
わけ。自分でも半ば自棄になってるのは認めるわ。でも、私は力を  
付けて兄さんの夢をかなえたいの」

「初期に比べれば十分力つけてると思うがな。現状じゃ不満か？」

「はたから見てると、強くなってるのかもしれない。でも、私自身  
強くなってる実感がないのよ」

「あー、確かにな。自分より強い人に教わっていると確かに自分で  
実感はもてないわ。俺も経験があるわ」

「あんたでもそんな経験があるのね」

しばらく無言が続く。そして、ティアナが立ち上がる。その表情  
は少し晴れ晴れとしていた。

「話を聞いて貰って少しはスッキリしたわ。もうちょっと自分でが  
んばってみるわ。当面の目標はあんたね」

そう言うのにやりと笑う。それに俺も笑い返す。

「追いつけるものなら追いついてみる」

「ええ、追いついてやるわ。じゃ、コーヒーありがとう」

そういつてティアナは帰っていった。

明日は、オークションの護衛任務だ。

某研究施設

「で、ホテルアグスタに本当にレリックはあるのか？」

「みたいだね。まあ、オークションが行われている最中に地下で密売される予定らしいが」

「明日は誰かこちらにくるのか？」

「ルーテシアが出てくれるらしいよ。頼みたくなかったんだがね、流石に召還魔法を使える人が居ないからしかたなくね。ああ、あとこの間の彼女も出る予定だよ」

「マジかよ」

「まあ、あくまで護衛だけだね。もう一人の護衛としてガリユーが付くそうだし」

「後はガジェットか。まあ、レリックがあるってだけでいいや。じゃ、こっちはそろそろ寝るぜ」

「ああ、おやすみ」

白衣を着た男は通信していたモニターから目を離し勢いよく振り返る。

「さあ、序章の始まりだ。盛大に幕開けをしようじゃないか！」

男の目の前には百体近くのガジェットが存在していた。

とつとつ、影で動いてきた人物が表舞台へあがろうとしていた。

## 六話（後書き）

次回は記念一発ネタをやらかす予定です。

番外編1 (2000PV & amp; 4000ユニーク達成記念) (前書き)

と思ったら、もうちょっとで30000PV&5000ユニークだよ。

皆ー！ありがとうー！

今回、ネタバレを含むので注意して下さい。

魔法とHGSの出会い

魔法とHGSの出会いはほとんど同時だった。というより、同時に会ったと言っていていいくらいだ。

現在もスラム街に店を構えている変わり者と周りから思われているが、昔から変わり者だと思われていた。なにせ、小学生のなのに神社・仏閣やらが好きでよく近所のそういったスポットに遊びに行っていた。いや、遊びに行っていたというより見にいっていた。ゲームの影響で伝説やら神話やらに凝っていたのが原因だとも思う。今ではそんな昔のことなど覚えてはいない。

今では嘘だと周りから思われるだろうが、以外と身体が弱かった。なので、あんまり遠出はできず徒歩一時間ほどで往復できる場所に行くのが限界だった。

ちょうど、海鳴市との境目に家があったため海鳴にある神社に足を運ぶことができた。そこで、俺は一匹の狐と出会った。最初に合った時は、出会った直後にすぐさま逃げられてしまった。当時、病弱な身体のせいで友人がほとんどいなかった。せめて動物と過ごすぐらいしてみたいと思っていた矢先の出来事だったので、それはもう落ち込んだ。しかし、この程度であきらめてなるものかと、毎日神社へ通い詰め、あの狐の飼い主である神咲那美さんであった。那美さんとの出会いがあり久遠の好物などで釣ったりしてようやく仲良くなることができたのだ。今思えばあれは餌付けだな。

その期間が約二週間。以外と長く感じたが、那美さんは「二週間で久遠が私の家族以外になつたのは初めてだ」と言っていた。それから、学校が終わってからの数時間、休日は昼から帰らないといけない時間まで久遠と過ごしていた。時たま、久遠にじゃれつこうとする野良猫も交えて遊んでいた。

そんな生活を二カ月ほど送っていただろうか。そろそろ自分の誕生日が近付いてきた。家族にいつも遊んでいる狐も誕生日パーティーに参加していいかと尋ねたところ、快諾がもらえたので、久遠を誘いにいったのだ。那美さんもいつもお世話になっているお礼に誘いたかったのだが、生憎とその日は用事があるらしかった。久遠の方は連れて行っても大丈夫とのことなので、久遠本人に聞いたところ「くうくん」と嬉しそうに鳴いて返事をくれた。

誕生日前日、いつものごとく神社に遊びに来たわけだがそこには久遠ではなく巫女服っぽいものを着た狐の耳としっぽを付けた女の子がいた。年齢は自分より少ししたぐらいだろう。声をかけようとしたところ相手がこちらに気づいて逃げてしまった。だが、人間逃げたものは思わず追ってしまうもので、俺も例にもれず彼女を追った。そして、彼女は俺の目の前で狐の久遠の姿を取ったのだ。余りの出来事に思わず腰を抜かしてしまう。そこへ、ちょうど那美さんが現れたので事情を聴くと久遠を叱った後に説明してくれた。なんでも、久遠は妖怪の狐で人に化けることが出来るそうだ。それにあと一回の変身を残しているらしい。それなんて「リーザ」と思わず言いそうになった。久遠本人はとても疲れるのでならぬらしい。

今更だが、久遠の正体を知った時は自分がまるでファンタジーゲ

ームの登場人物になったような気分がした。人に化ける動物。妖怪だろうがなんだろうが、そのことが自分をわくわくさせた。誕生日当日はさすがに両親に言うわけにもいかず狐の姿でいてもらったが、それ以降は、たびたび久遠が人の姿で遊ぶようになったので色々遊びの幅が増えた。

久遠のことが判明して冬に差し掛かるころ、那美さんから妖怪がこのあたりで悪さをしているので年が明けるまでこのあたりには来ない方がいいと言われた。久遠と遊びたかったのだが、どうにも今回は久遠が手伝うことになっていたらしく仕方なくあきらめることにした。

と、一度決意したはいいがそこは子供。我慢が出来なくなって夜にこっそりと家を抜けだし神社へと向かった。抜け出せた理由としては両親がともに夜勤だったからだ。

だが、神社について目にしたのは短い刀を持った那美さんとそれに対峙するかのようになっている久遠を成長させたような人だった。しばらく茫然と眺めていたが、「やめて、久遠！」と那美さんが叫ぶ。やっぱり久遠だったのかと思ったが、思わず久遠の名前を口に出してしまい、二人に気づかれてしまう。那美さんはあまりのことに驚き、久遠は自分を殺気のもった眼で見てる。恐怖に襲われ、その場から動けなくなる。そして、そこに久遠から放たれた雷が自分に当たるはずだった。が、自分の元に駆け付けた那美さんがそれをかばい、倒れる。何とか恐怖を払いのけ、那美さんに声をかけるが気絶しているのか返事がない。再び久遠が攻撃を仕掛けようとする。必死に呼びかけて止めようとする。一瞬久遠が苦痛にゆが



んだ表情をするが、久遠の放った雷撃は自分に直撃した。

雷撃を受けた時は正直死んだと思った。那美さんは霊力があつたから大丈夫だったのだろうが一般人の自分は死んでしまう。

どうして、久遠はあんなつたのだろうか。苦痛にゆがんだ表情を見る限り、どうも自分の意志ではないようだ。操られているだけかと少しだけ安心したが同時に悔みもした。どうして自分には力が無いのだろう。友達一人ぐらい助けられずに何が男の子だ。薄れゆく意識の中、再び久遠是那美さんと自分に向けて雷撃をはなった。

しかし、その雷撃は防がれた。自分の手によつてだ。正直何故立てているのかもどうやって防いだのかも分からない。体中に走る痛みで今にも泣きそつた。でも、友達を助けるために立ち上がる。久遠を助けたという気持ちだけで彼女の方へ向かう。背中には、半透明な蝙蝠のような羽が四枚広がっている。そして、徐々に自分の姿は変質していつて悪魔のような容貌となる。その姿になったとたん、久遠の後ろにおそらく操っているであろう靄のようなものが知覚できるようになる。一瞬で間合いを詰め、その靄に殴りかかる。直観的に倒すことはできなくてもダメージを与えることはできると分かった。ゆえに殴る。その攻撃は靄に当たり、一瞬靄はひるむ。だが、復帰させる暇は与えない。戦うことすらしたことない自分だ。ただ、ひたすらに力任せに靄を殴り続ける。

殴っていると、那美さんが目を覚まし目の前の光景に驚く。そして、久遠の後ろの靄が徐々に力を弱めていつている。那美さんに声をかけとどめを任せる。ダメージを与える方法はわかったが、奴を完全に倒す方法までは分からなかった。なのであとは那美さんに任せる。そして、那美さんが靄を消し去ったところを見て、安心してその場に倒れた。

目が覚めると、海鳴にある大学病院だった。起きて目に入ったのは両親の顔。母親に頬を打たれ、泣きながら無事でよかったと言われた。母親につられて思わず自分も泣く。父親も、めったに見せない涙を浮かべながら自分が無事だったことを喜んでくれた。しばらくたって、ようやく落ち着いたとおもったら今度は那美さんがやってきて泣きながら自分の無事を喜んでくれた。

那美さんから話を聞くと、久遠はいつもの久遠に戻ったらしい。だが、油断はできないため、来年の一月までは実家の鹿児島で様子を見るとのことだった。この話をした為、夜家を抜け出したのがばれてしまい、両親にはきつく叱られてしまった。

それはさておき、あの日の夜自分が見せた異様な姿について説明があるということだ。矢沢先生という先生が説明してくれた。どうも自分はHGSと言う遺伝子障害を持っているらしい。現在では有る程度科学的な措置で力を抑えられるが安定するまでは薬を服用しなければならぬらしい。そして、自分のHGSの内容は皮膚の硬化化と身体能力の向上だった。通常のHGS患者も多くが身体能力向上があるらしいが自分のはそれに特化したものらしい。頑張ればいろいろな能力も使えるらしいが、今の年齢では身体に影響があるからと理由で、それも止められた。というより、HGSの使用を止められた。今回は使用した時間が短かったが長時間そのまま使用すると身体のおちこちが壊れ一生動けない身体になると言われてしまった。さすがにそれは勘弁願いたいので薬とHGS能力を抑制する機器を取り付けた。正直、あの姿には二度となりたくなかった。なので助かったと思った。あの悪魔のような姿は自分にとって恐怖の対象だ、ならないに越したことはない。HGSの話はこれで終わりだ。

退院し、家に帰ったとたん両親に自分たちは魔法使いだと打ち明けられた。自分たちが行ってきた医学では自分の病弱な身体が治療できなかつたらしく、人の医学に特化したこの地球に来たそうだと。そして、自分の病弱な身体はこの魔法を使ったための核であるリンカーコアというものが安定しなかったせいで身体に影響が出ていたらしい。両親の住んでいたミッドチルダという場所ではどうしても魔法方面の色が濃く、地球でやっているような医学は発展していきなかつたみたいだ。魔法でダメなら医学でと思っていたらしいがそれもダメで、あきらめかけていたらしい。だが、今回の一件でリンカーコアが安定したらしい。

今推測すると、リンカーコアに許容範囲以上の魔力をため込んでおり、外に放出するには自分はデバイスがないと無理なため、ため込むだけため込みその魔力に耐えられずにリンカーコアが不安定になった。要は水が満タンまで入ったコップにずっと水を入れ続けるようなものだ。本来ならその水は外に漏れるが、身体というさらに大きな器に障害されて魔力が漏れなかったようだ。それが今回の事件で何らかの形でその魔力が放出され許容範囲以内になったため安定したのではないかと思う。結果として、この時点でデバイスなどの媒体がないと魔力が放出できない体質で有ることが判明したのは幸いだった。だが、あの時はデバイスは持っていなかったため、実際のところどうなのかは分からない。

なにはともあれ、こうして魔法という力とHGSという力を同時に手に入れた。当時は成長するにつれ人と違うことに悩んだりしたが、同じHGS患者の人の話や両親のミッドチルダにいる友人と会う人達の話聞いて、力を拒絶するのではなく受け入れることを選

んだ。今では、この能力に助けられ感謝している。

久遠だが、二月に入ると元気な姿を見せてくれた。その際に助けられてありがとうと笑顔で言われたので、それだけで力を手に入られて良かったと思えた。

六課の隊舎の休憩室で、部屋から出てきたアルバムを見終える。すると、そこへ新人メンバーがやってきた。

「セツナさん、それってなんですか？」

「ん？ああ、子供の頃のアルバムだよ。部屋を片付けてたらでてきたんでな。日当たりのいいここで見てたわけだ」

「見せてもらってもいいですか？」

「ああ、どうぞ」

エリオの質問に答えた後、キャロが見たいと言うのでアルバムを渡す。みんなアルバムに夢中になり、この狐かわいいなどはしゃいでいる。まあ、当時は久遠と過ごした日が多かったので久遠と俺との写真ばかりなのはしょうがない。

「この狐のこと教えてもらっていいですか!？」

「落ち着きなさい、馬鹿スバル！」

何やら少し興奮した様子で聞いてくる。ティアナが止めようとし

ているが力負けして抑えられていないようだ。というより、ティアナ自身も聞きたがっている様子だ。

「わかった、わかった。さて、何処から話したものか」

こうしておれば、再び久遠との日々を思いを馳せる。とりあえずは、期待に満ちたこの四人に久遠との出会いを話してやらなければならないな。

さて、こいつらに久遠との出会いを話してやるか。

番外編1 (2000PV & amp; 4000ユニット達成記念) (後書き)

戦闘スタイルだけは完全ダンテ化。でもHGSで強化しても魔力は変わらない件。

次回からはメインのストーリーに戻ります。

## 七話（前書き）

ペースが落ちてきた。

しばらくは週一から3〜4日に一回の更新になりそうです。

理由は情報技術者試験が迫っているから

ヒロイン候補が二名確定

## 七話

やってきました、ホテルアグスタ。俺の部屋にかけれそうな掛け軸とか出品されるらしいので購入したいが生憎と暇がない。中将の娘であるオーリスさんに頼もうとしたら冷たい目で拒否された。仕方なく頼りたくなかった知人に購入を頼んだ。余り高い金額で買わないことを祈るばかりだ。最近、現場でのセクハラが酷いらしくストレスが溜まっているらしい。鬱憤を晴らしたいなどとぼやいていたので、高額で購入や関係ないものの購入までしてしまわないか心配である。

そんなことはさておき、俺の配置はスターズ3・4とライトニング3・4の配置されている中間点だ。どちらのフォーローにもすぐに回れるようにこの配置にしたらしい。そんなことより隊長陣一人でもいいから前線に出せと、小一時間説教がしたい。しかし、こちらも雇われている身なので強くは言えないが。ちなみに、シグナムさんとヴィータさんは最前線で単独行動をとっている。指揮官はシヤマル先生。あんた医務官だろ。指揮能力高くても医務官だろ。前線にでてくるな。

というか、俺のサポートが無いとか捨て駒扱いすぎる。最悪切り札何枚か切ることになりそうだなとか考えていると、真横に誰か立つ。

「!？」

気配すら感じさせなかった。かなりの実力の持ち主と判断し、距離を取り銃を抜いて照準を合わせる。そこにいたのは、先日遭遇し



たべヨネツタモドキだった。

「ルーテシアちゃん、さすがね。ピンポイントでここに転送とは。後でお菓子でもプレゼントしましょう」

警戒をしつつ、相手の様子をうかがう。間違いなく、俺のデバイスを作った人物の知り合いだが、どうしてここにいるのかは分からない。

「いつまで銃を突きつけてるつもり？生憎と今日はあなたと戦うつもりはないわよ」

「問答無用で襲ってきたやつが良く言うぜ」

「悪かったわね。あの人があなたが強いって言うから試してみたくなったのよ。まっ、私から見れば及第点ってところだけどね」

戦意がないようなのでとりあえず銃をホルスターに収める。もちろんすぐさま抜けるように警戒は忘れない。

「ガジェットガジェットの襲撃まであと三十分。それまであなたと話でもしようと思ったのよ。どうしてあの人があなたに注目しているのかが知りたいからね」

「まあ、いいだろう。で、何が聞きたいんだ？」

「んーっと。そのスタイルってデビルメイクライのダンテでしょ？」

「ご明察。前日も言ったがあなたはべヨネツタだよな」

「まあね。いや、あのゲームは良かったわ。トーチアーアタックとか」

間違いない、こいつはSだ。そう確信して白い目で相手を見てみると、あわてたように顔の前で手を振る。

「いや、さすがにトーチアーアタックまでは再現してないわよ。魔力使ってできないことはないけどさすがに現実でやると引くのばかりだから」

「で、そんなことはさておき何の用なんだ？」

「ああ、またお届けものよ。今度はアグニとルドラ。一つ聞きたいんだけどなんで3の武器なわけ？」

アグニとルドラを受け取り、質問にたいして少し考える。やはり、この武器らを使っているのはこれが一番の理由だ。

「なんだかんだで、あれが一番好きなんでな。武器的な意味で」

「ふーん」

興味なさげに返事をされた。個人的な趣味なので別にそのあたりはいいのだが。

ああ、そういえば名前とこの間襲ってきた理由を聞いてなかった。いい機会なので聞くとしよう。

「ああ、お互い自己紹介がまだだったな。セツナ・カミヤマだ」

「シルフィーと呼んでくれればいいわ。っと、そろそろ時間だから失礼するわね」

襲ってきた理由を聞こうとしたらシルフィーはその場から転移魔法を使い消え去った。まあ、俺に戦闘を仕掛けてきたのは『向こう側』で何かあったのだろう。まあ、今は捨て置くとしてしよう。

彼女が去った直後、最前線にいた副隊長二人からガジエットの襲撃があったことを聞かされた。

さすがに最前線二人だと抜けられる数が多いため俺のところにもガジエットがやってくる。ケルベロスとアグニ・ルドラを使って近接戦のみでガジエットを破壊していく。

又ンチャクに慣れていないせいとか、やはりケルベロスは使いにくく困まれた時適当に振り回して敵を吹き飛ばすぐらいのことしかできない。どうして俺はこれを作ってもらったんだろうかという根本的な疑問を持ってしまった。なにはともあれ、こちらの方の敵はあらかた片付いた。

『セツナ君、聞こえる？』

「シャマル先生、どうしました」

『ガジエットがスターズの二人の方に集中しているわ。援護に向かっ  
つて』

「了解」

シヤマル先生から通信が入り、スターズの二人の方へ向かった。

たどり着くと、クロスミラージユから過剰にカートリッジを消費した跡が見られる。そして、ティアナの周りには明らかに現状では操作できない数のスフィアが展開されている。

「あの馬鹿っ！」

どういった理由か分からないが、あいつは力に固執している。確かに、他の新人三人と比べると周りが突出しすぎていて彼女一人が並の魔導師に見えてしまう。今の状況を見る限りこの戦闘で何としても功績を上げようとあせっているのだろう。

「やめろっ！」

「クロスファイヤー、シューッ！」

制止が間に合わずにスフィアが放たれる。そしてその中の一発がスバルに向かって飛んで行った。

「くっ」

エボニーとアイボリーをとりだし、それぞれ数発ずつスバルに向かって飛んでいく魔力弾を撃ち落とす。何とか撃ち落とすことが出来た。俺の手元の銃からはカートリッジが排出される。さすがに俺の魔力では撃ち落とすのは無理だと判断し使用した。俺の持っている全ての武器にカートリッジシステムが搭載されているが、外見では分からないように細工してある。ゆえにカートリッジシステムが搭載されていることは俺の切り札の一枚だ。まさか、それを味方誤射を止める為に使うとは思わなかった。

「お前ら二人とも下がってろっ！」

「で、でも！」

「……」

俺の言葉に反論しようとするスバルに、スバルに自分のスフィアが直撃しそうになったことに茫然とするティアナ。そんな二人にイライラしていた俺はおそらく今の二人、特にティアナには絶対に言っではいけないだろう言葉を告げてしまった。

「今のお前らは『役立たず』なんだよ！」

その言葉でティアナが崩れ落ちた。だが、生憎とガジェットに囲まれている為、気にしている余裕がない。イライラしているのは自覚できていたため、冷静になるために周りのガジェットを殲滅していった。

結果から言うと、ガジェットを蹂躪していた最中にシグナムさんとヴィータさんが参戦し、殲滅させた。ライトニング二人は召還師の存在を確認したらしいが、途中ガジェットに阻まれて姿までは確認できなかったらしい。

任務が終了し、冷静になった俺は先程ティアナに言った『役立たず』宣言を後悔していた。彼女は、周りが優秀で有るがゆえに任務と言う舞台上で活躍し自らの居場所を確立させようとしていたのだから。今回はそれが行き過ぎてあぁなってしまうたわけだが。

しかし、ミスショットをしたのは確かな事実だ。今の相手はガジエットという機械だ。非殺傷設定なんて切っている。その状態でのミスショット。最悪スバルは死んでいたかもしれない。これは見過ごすことのできないミスであるが、そういった状況に彼女が追い込まれていたのに気付けなかったのも問題である。

そんなこんなでひっそりと落ち込んでいる俺に声をかけてくる人はいなかった。そして、機動六課の二度目の出撃は後味の悪い形で終了となった。

ちなみに、目的の物の購入だが悪い方向の予想があたり、予想価格の倍以上で購入されていた。そして、そのほかにも彼女が欲しかった品が急遽出品され、その品もかなりの高額で購入したそうだ。ちなみに支払いはすべて俺である。

機動六課と同時に店の仕事も再開しないと生活できそうにないと思いはじめた俺である。

## 七話（後書き）

分かると思いますが、ヒロイン候補はティアナとシルフィー。最悪  
IFルートで二人分書いてやる。またはハーレム（笑）ルートとい  
う、どちらともひつつかず二人が取りあって争うルート。

ちなみに、今回も職場からお送りしております。

## 八話（前書き）

過去最長を記録した。どうしてこうなった！

気付けば40000アクセス突破、7000ユニークまであと120人ほです。

この話を投下したら多分7000ユニークは突破です。  
みなさんありがとうございました。



## 八話

ホテルアグスタの任務からしばらくたった。ティアナとはいまだに気まずい関係のままだ。謝ろうと思ったのだが、やはりというか避けられているらしくなかなか接触できない。訓練も個人演習に入ってから終わる時間もまちまちになってきたため終了する時間も合わない。そのことが気になってか訓練に集中できずシグナムさんに何度か注意される。

いい加減うだうだ悩むのはやめて今夜ティアナに謝りに行くことにした。

で、人に聞いて探しているうちに人気のないところまで来たんだが、本当にここにいるのだろうか。そんなことを考えていると、ヴァイス陸曹が居た。

「ヴァイス陸曹、こんなところで何を？」

「ん？ああ、あんたか。いや、ティアナのあれをな」

ヴァイス陸曹が指をさす方向をみると、ティアナが自主訓練を行っている。点滅するスフィアに銃の照準をただ合わせるだけの訓練だが、明らかに動きが荒い。疲れている身体を無理やり動かしているようだ。

「いや、注意はしたんだがね、一向に聞く気配がないわけよ。あんたからも何か言っちゃってくれないかね」

「まあ、もとより話をしにきたのでそのあたりは問題ないが。というかあんたの方が階級上なんだから強制的に命令して休ませるよ」

「俺も考えたんだがね、どうも一時しのぎのような気がしてな」

確かにあの様子を見ると命令された日はやめるだろうが、翌日また同じことを平気でしていそつだ。

「はあ、分かった。あんまり期待するなよ」

俺が言っても同じような気がするが、本来の目的の為此こは引けなかったのでゆっくりとティアナの方に近寄る。しかし、ティアナはこちらには気づかない。いつもの彼女なら広い視野を持っているのでこのぐらいの距離で気付かないはずはない。そして、かなりの至近距離に近づき、こちらの方のスフィアに照準を合わせた時に初めて気付いた。

「いつからそこに？」

「少し前からだ」

こちらを睨みつけるが迫力がない。これは思った以上に疲れているようだな。

「何しに来たんですか？」

「謝りにだ。この間は頭に血が上っていたとはいえ、役立たずと言つてすまなかつた」

そう言つて頭を下げる。一発ぐらい殴りかかってくるだろうと思

っていたが、こちらの予想とは違った反応を見せた。

「ああ、そのことですか。別に気にしてませんよ。役立たずなのは事実ですし」

かなりやさぐれている様子だ。少しだが、この無理な訓練のしている理由が見えてきたが、核心が持てないので話を聞いてみるか。

「で、こんな時間までなんでこんなことをやっているんだ？」

「あなたには関係ありません」

どうやら俺の間には答える気がないようだ。直球で言ってもどうせ拒絶されるのは目に見えているので変化球で攻めてみるか。

「ふむ、なら一つ昔話をしてやろう」

「結構です。訓練の邪魔になるのでどこかに行ってください」

「まあ、聞け。あれだったら俺の独り言だと思って聞き流しても構わん。それに、これぐらいで集中を乱すのか？」

「っ!」

俺の言葉に対して睨み付けることで答えるティアナ。彼女の性格上ここまで言われたらこちらの条件を飲むだろう。話を聞かせる状況は作った。さて、いまから話すことで少しは心変わりをしてくれるといいんだが。

「昔、ある少年がいました。彼は周りより魔力値が低いことを気にしておりせめて技術だけでも思っ**て**本来の仕事が始まる前と終わった後に過剰に訓練に励みました。日に日に少年が**疲**れていることは周りにも分かってきました。そして、少年が所属していた部隊の隊長が少年に向かつて自主訓練を止めるように言**っ**てきました。仕方なくその日は訓練を中止しましたが、翌日からはまた同じことを繰り返しました。さて、そんな毎日が続いていると失敗が許されないと**言**われた任務を受けることになりました」

「どうなつたんですか？」

話を一旦区切ると、続きが気になったのかティアナが**促**してきた。少し満足そうにしてうなずいて話を続ける。

「任務自体は成功しました。しかし、少年は過剰な訓練が崇**っ**て作戦中に倒れそこを敵に付け込まれて突破された揚句に大けがをおい**ま**したとき」

「その人はどうなつたんですか？」

「いるじゃん、目の前に」

そう、これは一時期ゼストさんたちの部隊に俺が預けられていた時の話。もう少し発見が遅れていたら、魔導師として再起不能と**ま**で言われていた。本当にこのことに感謝してもしたりない。

だからだろう。俺自身が妙にティアナ親近感を覚えたのは、昔の俺に重**な**って見えたせいだろう。

しかし、この話は嘘である。研究施設への襲撃自体は成功したが、

戦闘機人と遭遇し俺以外の三人が行方不明となった。クイントさんの血液が大量に発見はされたが、なぜか遺体は見つからなかった。メガーヌさんやゼスト隊長も同様である。

全体として見るならば成功はしたが部隊として見るならば失敗した作戦であった。ちなみに中将と知り合ったのはこのあとの話である。

「まあ、お前が今やっていることは否定しない。だが、やりすぎは禁物だ。いつ出撃がかかるかも分からない状態なのに、訓練で疲れて実力が出せず失敗しました、じゃお前も納得できないだろ？」

「それでも、それでも私は！」

おそらく自主訓練を止めることはしないだろう。ならば、無理のないようにすることを約束させるつもりだった。しかし、ティアナはそれを受け入れられなかったようだ。少し涙を流しながら俺に叫んできた。

さすがに空気を読んだのか、ヴァイス陸曹がその場を立ち去るのが見えた。こうなったらとことんこいつと話してみるか。

「ティアナ、何がお前をそこまで駆り立てる？」

さすがに立って話すのは彼女に悪いので、並んでその場に座る。そして、静かにティアナは語り始めた。

昔、彼女には兄がいたそう。両親を早いうちになくしていた彼女は兄が親代わりであり、自慢だった。彼女の兄、ティード・ランスターは将来を有望されており、その実力から執務官になるのも夢

ではなかった。しかし、そんな彼を不幸な事件を襲った。任務としてはAランク魔導師の犯罪者を一人捕まえるといったものだった。こちらはBランクが数人と人数が少ないながらも、今までの実績上難しい任務ではなかった。しかし、この日唯一違ったのは本局からの視察官がこの事件に介入したことである。管理局と言っても派閥問題があり、当時は本局のほうが権力が上だった。その視察官が自分が指揮を取ると言い出したのが悪夢の始まりだった。

彼が出す指示は無茶な要求ばかりで、とても地上のBランク魔導師が何人集まっても無理なことばかりを指示する。権力的に彼らの部隊長には視察官には逆らえなかった。そんな無謀な指示をぎりぎりのラインでこなしてきたが、犯人を追いつめた時には今までの指示のでたらめさに精神的・肉体的にも限界に達していた。一瞬気が緩んでしまったのだらう、その隙を突かれ犯人は局員に魔法で攻撃を行い逃走した。

もちろん、犯罪者が非殺傷で攻撃するはずもなく、その殺傷設定でされた攻撃は運悪くティータ・ランスターへと直撃した。その傷が致命傷となり彼は殉職した。

しかし、話はそれで終わらなかった。指揮をしていた視察官はあろうことか、彼が所属していた部隊を貶し、さらに殉職したティータ・ランスターを設立たずの面汚しと罵ったそうだ。

思わずあの時は彼女に役立たずと言ってしまったが、思った以上にあの言葉は彼女を傷つけていたのかもしれない。後でもう一度謝罪しよう。

「だから私は、兄さんの代わりに執務官になる。そして、兄さんや兄さんの仲間を馬鹿にしたあいつらを見返してやりたいんです」

「アホか、お前は」

思わず口が滑ってしまった。俺の言葉に先ほどとは比較にならないほど睨みつけてくる。しかし、後にはひき返せない。彼女には悪いと思うが、ティアナの為にここは悪役を引き受けよう。

「どうあがいても、君は君の兄さんの代わりにはなれない」

「何ですか……？」

「では聞くが、君はティード・ランスターか？」

「違います。答えをはぐらかさないでください！」

「はぐらかしてはいないさ。今、君自身が言ったことが答えさ」

表情は怒ってはいるが、俺が言ったことをしっかりと読み解こうとしている。確かに、他の三人に比べ彼女の魔力的な潜在能力はお世辞にも高いとは言えない。しかし、彼女は三人にはない才能がある。

指揮官としての才能だ。部隊では個人の技能も重要だが、それ以上に指揮の優秀さでその価値が決まってくる。彼女にはその才能がある。それは管理局の次代を担う才能だ。だから、彼女には自信を持ってほしい。その才能をここでつぶしてほしくはない。だから、今は俺を恨んでくれていい。彼女が自信を持てるようになるのならば。

「分からないようだな」

「……はい」

とりあえず、尊大に聞いてみたが彼女はうつむき落ち込んで答える。

では、答え合わせといこう。

「では、お前の名前を言ってみる」

「ティアナ・ランスター……」

「元気がないが、まあいい。そう、お前はティアナ・ランスターであつてティード・ランスターではない。人がどうあがいたって別の人の代わりになんてなれるもんじゃないんだよ」

「なら、どうすればいいんですかっ!」

「お前の兄の代わりに何かになるのではなく、お前自身の意思で未来を決める! 普段お前らの評価をしていない俺だがな、一番お前のことを買っているんだぞ?」

「え……?」

実は何度か集団模擬戦の際新人四人対高町教導官の演習を何度か見学という名目で覗いていた。確かに個人技能でいえば他のメンバーより成長は遅いが、周りを見渡し勝利への道筋を立てる能力は圧倒的に伸びている。これは、自分が何をできて何をできないのか、他の人が何をできて何をできないのかをはっきり把握していないと



できないことだ。データを見せてもらったが、初期の頃の彼女と比べると作戦立案から実行までの時間は徐々に短くなっていった。隊長・副隊長陣はその事実気がついた様子はなかったが。

その模擬戦に対してレポートを書くことになっているが、指導者ならこれぐらい把握しておけという嫌味も込めてティアナの指揮能力向上のことは一切言わないでおいた。後日、高町教官が「良く見てるね」と言ってきたがどこがだと言ってやりたかった。

話をもどそう。とりあえず、彼女には自信を持ってもらうことが大事だ。なので今思っていることを正直に話すことにする。

「お前の指揮能力は俺も驚かされてばかりだよ。ティアナが万全の状態だったら俺も出し抜かれるかもしれないからな。幻術も平行して使われた日には確実に負けるな。確かに、他の三人とくらべて自分の成長が実感できないのはわかる。思考の成長なんて実感できるものじゃないからな。今は歯がゆいかもしれない。でも、お前は確実に成長している。ティアナは自信をもっている。他の誰が認めなくても俺がお前を認めてやる」

「あ……」

認められたことがうれしかったのか、急に泣き出したティアナ。俺の胸にしがみついて大声で泣き始めた。抱き寄せて安心させたかったが、後から文句を言われそうだと思い、頭をなでる程度にする。

「急に兄の代わりに目指すのを止めるって言われてもむりだろうかな。俺の意見は参考する程度にしておいてくれ。でも、俺がお前を認めているのは本当だからな」

その後、落ち着いたティアナから自主訓練は続けるが、今までのような無茶はしないと約束し、その場で別れた。翌日からなぜか俺も訓練に付き添うことになり、こういった状況ではどうすればいいのか、などの話を繰り返していた。

そんなティアナに触発されてのか、新人メンバーの雰囲気が変わってきた。というより、全員ティアナの自主訓練に参加しただのだ。

スバルは自主訓練に参加してから、突破力がぐんぐんのびてきた。しかし、突撃思考は直らず。理解できてはいるらしいのだが、考えるより先に身体が動いてしまふらしい。数をこなすうちに序所ではあるがその辺りの癖が治ってきた。このままの調子だと、的確に動けるアタッカーになりそうだ。

その突撃思考につられていたエリオだが、注意して以降は周りの状況を考えて動くようにはなった。だが、考える力がまだたりずときどき無茶をするが、そのあたりは経験がないので仕方がないだろう。経験を積みめばうまく立ち回ることができそうだ。

キヤロについては、みんなのフォーローだけじゃだめだと思ったのか戦術関係の本を読むようになり始めた。まあ、書いていることが難しいので頭を悩ませながら本を読んでいるのはほほえましいものがある。戦術について分からないことがあればティアナに聞いて理解しようとしていた。現状では戦術を組み立てるのは難しいだろうが、全体を見渡せる視野を持つようになれば適切な強化魔法で周囲をよりフォーローできるようになるだろう。

俺については完全に蚊帳の外な雰囲気だが、かかわった人たちが成長していくのは見ていてうれしいものである。

こうして、教官たちがあずかり知らぬところで四人は急激に成長していった。

「おかしいなあ…どうしちゃったのかな」

現在、スターズ二人と高町教導官の模擬戦中。こうなった原因はティアナにもあるが大部分がスバルのせいである。

最初は作戦通りに動いていたスバルだったが、予想以上に自分がうまく動けたことに感激しまだやれると自分の技術的な限界を理解せずに突撃。ティアナは作戦から逸脱したスバルを制止するも、「大丈夫」と言っただけで聞かなかった。ここで無理にでも止めていけばこうはならなかった。ここはティアナの反省点だ。そのせいでスバルをフォローできる距離ではなく、仕方がなく作戦の修正をしながら前線に移動。スバルのフォローできる距離にたどり着いたが、スバルが至近距離で戦闘しているため誤射の可能性を考え、フェイクシルエイトで分身をつくり、注意をそらして、スバルの活路を見出そうとした。だが、なぜかそこでスバルが反応する。その隙について高町教導官はスバルを受け流す。力を込めすぎたのか、そのまま遠くへと吹き飛ぶ。近くにスバルのウィングロードが残っていたため、それを使用して高町教導官に回り込んでクロスミラーージュの先端に魔力刃を展開して自分を取るはずでないだろう近接攻撃をもつて高町教導官へせまった。意外性はあるが、技術が伴ってないからあれはまずいな。後で説教だ。あと、スバルはいい加減あの突撃

思考を直せないのだろうか。

で、それをデバイスをオフにした高町教導官が魔力刃を素手で突かんで今の状況になったのだ。

「がんばってるのわかるけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ」

ティアナは魔力刃の展開を解き急いでその場を離れる。しかし、少し遅かったのかピンク色のバインドで束縛される。拘束されていても、デバイスは手元にある。カートリッジをリロードして、複数のスフィアを的に向かって発射する。しかし、障壁に阻まれ相手に当たることはなかった。

「練習のときだけ言うこと聞いてるふりで、本番で無茶するなら練習の意味、ないじゃない。ちゃんと、練習の通りやるつよ」

瞬間的に収束させた砲撃をティアナに打ち込む。何はともあれ、撃墜判定だな。あれは。しかし、高町教導官の様子がおかしい。

「ねえ、私の言ってること私の訓練、そんなに間違ってる？」

教導官のまわりに急激にスフィアが展開される。まさか、あれをティアナに打つつもりか？

「少し、頭冷やそうか……」

そして、そのスフィアが全てティアナに向かって放たれた。

『スタイルセレクト、ロイヤルガード』

一瞬でティアナの前に移動し、全てのスフィアを受け流す。多少痛みは有るが、直撃するよりはるかにましである。戦闘行動には支障が出るほどの痛みではない。

「邪魔、しないでくれるかな」

「スバル！ティアナを連れて下がってる！気絶してるから医務室に連れて行け！」

「は、はい！」

高町教導官の言葉を無視し、スバルにティアナを医務室へ連れていくよう指示をだす。

「ねえ、ちゃんと人の話は聞こうよ」

そう言ってスフィアを撃ってくるが、片腕でスフィアを弾く。その腕には、雷がまとわれているように放電していた。

「まあ、雇われていたんで今までは自重してきたが、我慢の限界だ。あんたらに俺の本当の力を見せてやるよ。自分が知らないモノと対峙した時の恐怖を味わうがいい」

そう言い終わると、何処から降ってきた雷が直撃する。全員が目を閉じて、再び目を開くとその場にいたのは、セツナではなかった。言葉にするのもおぞましい容姿をした人の形をしたナニカ。

「さて、戦闘開始と行こうか」

二重に重なったような声でそう告げる。

後にこの模擬戦を目撃した人物はこう語った。あの姿と戦いは、まさしく悪魔そのものだったと。

## 八話（後書き）

ティアナルートへのフラグが成立しました。

今回はスーパーセツナタイム。悪魔の姿となり本気になったセツナさんが暴れまわります。

Figmaのティアナさんを購入。サウンドステージXの髪を下ろした状態にして枕元に飾っています。ティアナはロングヘアが似合ってると思う。

ちなみに、なのはで一番好きなキャラは昔はフェイトorシグナムでしたが、1年ほど前からはティアナ一筋です。

更新期間を宣言していた時より短い間隔で投稿。  
仕事がないからなせる技だな

## 九話（前書き）

ついこの間、2000PV&4000ユニークで喜んでいたら気づいたら5000PV&8000ユニーク達成。

目にしたときは目が点になったわ。

皆、ありがとう！

今回は何回も修正した話。そのせいで遅れました orz  
テキスト量は前回を上回っています。

セツナさんの講釈「作者の考え ってな感じですので今回で賛否両論分かれそうなきがする。

そんな不安を抱えつつ本編どうぞ



## 九話

俺命名の『魔人化』した状態で、高町教導官の前に浮かんでいる。HGSのこういった戦闘方面での使い方は、リスティさんというフリス先生のお姉さんに教わった。彼女に教わったのは、いかに自分の能力を把握してうまく使えるかということと、サイコキネシスによる空中浮遊にレポートだ。ちなみにこれには魔法なんて一切使っていないので現状ここにいる人物には魔力反応による把握は無理だろう。

『マスター、リミットは五分です』

「一分で終わらせる。カウントスタート」

言い終わると、アイリスから数字を読み上げる声が聞こえてくる。多少キレてはいるが、冷静な判断を下せるレベルだ。対して目の前の『敵』は感情に任せて暴走しているだけ。精神状態から見ても勝ちは見えている。しかし、より確実なものにするため周りのものはすべて利用させていたどころ。

「アクセセルシューター！」

誘導がかけられている魔力弾がこちらに向かって飛んでくるが、少し身体をそらすだけで避ける。この状態の身体能力は魔力を使っていない状態の数倍の身体能力がある。さらに魔法で強化をかけているため、よほどのことがない限り動きを見切れる者はいない。たまにもものすごく勘のいい奴相手の時は役に立たないが。そんなことを考えていると、魔力弾が俺を包囲していた。相手の様子を見ると勝った気であるようである。まあ、通常の状態だと抜け出せないこ

とはないが、無茶をしないと抜けれないだろう。だが、今の状態は違う。

「はぁ……」

この程度で勝った気になられても困る。とりあえず、相手の出方を待つことにする。まあ、案の定一斉に俺に向かって魔力弾を撃ってきたわけだが。

爆発音とともに、辺りは煙幕に包まれる。

「やった、かな……」

「なのは！後ろ！」

高町教導官が倒したと思い安心するが、フェイト執務官の声で後ろを振り返る。しかし、全てが遅かった。

「……」

無表情で額に向かって銃を向け、戸惑うこともなく引き金を引く。障壁が魔力弾の邪魔をするが、土壇場で作り上げたものに強度があるはずもなく、あっさりとその障壁を通過し、頭部に命中する。

もちろん、非殺傷設定なので死ぬことはないが、それでもかなりの衝撃だっただろう。かろうじて意識がある状態だったが、再び引き金を引きさらに数発の魔力弾を撃ち込む。いた場所が地面に近かったせいか、落下による怪我はないようだが、完全に気を失っている。それを確認するとひとまず一息を入れる。

「3……2……1……、リミットオーバー。能力制御通常に戻します」

アイリスがそう告げると、人の姿へと戻る。

こうして、エースオブエース、高町なのはと民間協力者、セツナ・カミヤマの模擬戦は誰も予想しなかったセツナの勝利で幕を閉じた。

ヴィータさんが今にも飛びかかってきそうだったが、シグナムさんが押さえつけてくれていた。フェイト執務官はこちらを睨むだけで特に何もしてこなかった。

教官が気絶したことにより、その後の訓練は中止。各自部屋で休むようになった。当然のごとく俺は部隊長に呼ばれ、説教された。興味が無いので聞き流していて、最終的には一週間の謹慎を言い渡された。

謹慎と言われたものの反省する気は全くない為、自粛するつもりはなかった。とりあえず身体がなまらないように室内でできる簡単なトレーニングを考えようとしたところ、出撃の警報が鳴り響く。あわてて行くこうとしたが謹慎中だったため、そのまま別途に横になった。しばらくたって、八神部隊長からラウンジに来るようとの指示があったので、眠りかけていた身体を起こして、ラウンジへと向かった。

ラウンジについてまず目に入ったのは頬に氷嚢を当てているティアナだった。ぱっと見ではあまり分からないが、殴られたのだろう

と予想できる。問題は誰が殴ったかだ。

ラウンジに入ってきたところでスバルが気付いたのでこちらにやってくる。

「スバル、ティアナは一体どうしたんだ？」

「それが……」

スバルから聞くと、今回は空戦がメインな為スターズ隊長陣二人が出撃することとなった。メンバー全員が出動待機を言い渡されるがティアナだけは出動待機から外れると言われたらしい。で、ティアナが「言うこと聞けない奴は要らないってことですか？」と反論したところ、高町一等空尉が何か言う前にシグナムさんが右ストリートを決めて黙らせたらしい。で、時間が押していたためそのまま出撃した。その現場を見ていたシャーリーさんが、「もう見てられない！」と言つて教導の意味を教えるために高町一等空尉の過去の暴露大会を今から行つらしい。

話を聞いて思ったのは、シグナムさん。せめて何かあの人に言わせてから殴ってくれということと、過去の暴露大会とかくだらないと思つたことだ。後者のほうは、思わずぼやいてしまったため、周りから冷たい目線を受けた。

そんな冷たい視線をつけながら、ティアナの横が開いていたのでとりあえずそこに腰を下ろした。

「あー、大丈夫か？」

「大丈夫よ。これぐらいどうってことないわ」

強がってはいるが、表情の端に悔しそうな表情がでていた。ティアナのことは気にはなるが、とりあえずは過去暴露大会を見るとしよう。

話の中身は、ジュエルシード事件・闇の書事件といった隊長陣たちが経験してきた事件だった。ちなみに、ジュエルシード事件に関しては俺も被害を受けた。

ちょうど久遠との一件がおわり、HGSの定期診断を行っていた時期だ。病院の帰りに樹の根に襲われ、右腕を骨折。再び病院送りとなった。というか原因はあんただったのか、高町一等空尉。

で、長年無茶をやってきたせいで敵から撃墜され復帰不可能と言われるまでの大けがを負ったらしい。

ここまでの話を聞いて先日話したことを思い出したのかティアナがこちらを見てきたが、スルーする。

シャリーさんの話をまとめると、みんなが無理をしないようにしっかりと基礎を固めさせたかった、ということらしい。皆、黙って彼女の言うことを聞いていた。そして、しばらく沈黙が続く。

「くだらねえな」

その沈黙を破ったのは俺のこの発言。当然のごとく隊長陣は俺を睨みつけてくる。

「何処がくだらないんだ？カミヤマ」

シグナムさんが理由を話すように促す。鬱憤が溜まっていたのでここいらで晴らさせていたどころ。

「基礎を固める？大変結構なことだ。だが、この部隊の設立理由はなんだ？資料を見せてもらったが、たしか地上の対応速度が遅いので即応性を高める為にできた部隊だったな。それなのに訓練は今までも、そしてこれからも基礎だけをやっていくつもりか？くだらない。ああ、実にくだらない。即応性を高めるといふのなら基礎訓練はほどほどに、実戦に近い訓練の方を時間を多く取るべきだろう。敵は待つちゃくれない。ならば、短期間でこちらの実力を上げていくしかない。通年制の訓練校なら今の訓練でいいだろう。だが、いくら新人とはいえ、もうこいつらは部隊を構成する人員だ。即応性を上げるといふのなら、こいつらにもそれ相応の訓練が必要だ。いつまでも基礎ばかりやっていたら、それこそ応用が利かなくなつて死ぬぞ」

少し感情的になりすぎてしまった。これは反省だ。しかし、今言つたことは俺が思っている嘘偽りのない事実だ。周囲は黙っているが、ティアナとシグナムさんは俺の言つたことを自分なりに考えているようだ。エリオ・キャロの二人は俺が最後に言つた「死ぬぞ」といふ言葉に反応していた。スバルについては確かクイントさんの娘さんだったか。おそらくクイントさんのことを思いだしたのか表情が暗くなっていた。

すると、シグナムさんは自分の中で考えがまとまつたようだ。

「そついうのなら、貴様の方が高町より上手く教えることが出来るというのか？」

「少なくとも、こいつらを戦場で死なせないように訓練させることはできる」

戦場では絶対ということはない。だから、怪我をさせないようにとは言えない。だが、戦場で生き残る術という点ならばいくらでも方法はある。なんでも屋なんてやっているとな命の駆け引きの依頼もあるのだ。いやでも覚えなければ俺はここにはいない。

「さらに言わせてもらえば、部隊構成もまったく意味をなしていない。気づいてるか？この部隊が発足されてから隊長陣が新人たちのフォーローを全くしていないことを」

そう、俺が常々疑問に思っていたことだ。初出撃に限ってはエリオとキャロの落下をフォーローする様子すらみせなかった。確かに完全に降りれるようにしたのはフォーローと言えなくもない。だが、それは空戦が出来たのが隊長陣だけだったからにすぎない。ヘリがあったのなら空中の敵を撃墜する手段もある。単純に後部ハッチを開けて狙撃すればいいだけだ。当時はさすがに無理だったろうが、慣れればこういう方法もあるぐらいは説明してもよかつたではないのだろうか。さらに、新人メンバーより先に空中戦力を倒しておくながら列車の方の手伝いは一切していない。職務怠慢にもほどがある。

次にホテルアグスタでの出来事だ。指揮官として医務官を置くのはまず間違っている。部隊長が内部警備に行くのは、立場もあるのであまいいだろう。だが、他二人の隊長はなぜ内部警備に当てるのかがわからない。フェイト執務官については、スキルの室内戦をこなせるからいいだろう。高町一等空尉は室内戦が出来るようなスキルではない。なのに室内に配備はどう考えてもおかしいだろう。それに、こちらが担当していた戦域の最前線に近接が得意な副隊長

二人しかいなかったのも問題だ。ここに高町一等空尉がいたのなら、最前線が崩れて撃ちもらしが偏るといった現象は起こりにくかったであろう。

それ以前に、俺を一人にしたのも問題だ。確かに一緒に行動する人物がいないので、機動力は高くなるがそれでもたかが知れている。一人でスターズ・ライトニングの新人のフォローとかできるわけがないだろうが。

「あと、あんたらちゃんとなんか新人メンバーと接しようとしてるか？客観的にみてどう見ても意思が通じ合ってるようには見えないぞ。部隊構成も新人だけの部隊と隊長陣だけの部隊にした方がうまく回るんじゃないか？」

うすら笑いを浮かべて、八神部隊長にむけて言い放つ。これ以上ここにいると、気分が悪くなりそうなので踵をかえして自室に戻ろうとする。だが、こいつらに最後にもう一つ言っておかなければならないことがあった。

「ああ、最後にもう一つ。仲良しごっこで部隊をやっているならすぐ解散したほうが身のためだぞ」

そう告げて、俺は自室に戻っていった。とりあえず、もう何もやる気が起きなかったので寝ることにした。とりあえずはこの件に関してはケリが着いたと思う。

そう思っていたが、ティアナの話翌日に聞いてさらに俺は頭を抱えた。



アレから任務から帰ってきた高町一等空尉が話があるといってテ  
イアナを呼び出し、しっかりと話し合おうとしたのだが、彼女がそ  
れを拒絶。デバイスのリミッター2の解除状態を教えて貰ってから  
拒絶したとのことだ。なかなかの策士である。ちなみに、拒絶した  
ときの台詞は「貴方の教導は信じられませんので。それにいままさら  
仲良くしようだなんて虫が良すぎると思いませんか」だったらしい。

すごくいままさら感があるが、六課もうダメじゃなかるうか。とり  
あえず、中將にもう六課辞めたいとメールを出しておこう。

## 九話（後書き）

テイアナさん、まさかのなのはさん拒絶。

テイアナさんは地上ルートに道連れにすることにしました。

おおまかなプロットは決めてるが中身が決まってないのでどうなる  
かいまいちわからないです（おおま

はたしてどうなることやら。

## 十話（前書き）

久々の投稿。

色々忘れていたぶんがあり随分適当なように。

PC壊れたのでこんな時間に友人宅に襲撃して投稿だけさせてもらっています。

## 十話

あれから一週間が経過した。謹慎中、レジアス中将与通信し、『本来の』予定を少し繰り上げることとなった。教導の件も報告した結果、やはり機動六課を良く思わない隊員がこぞって地上からの支援を打ち切るべきだと意見してきたらしい。中将自身も、俺からの連絡や事件報告などを見て前々から悩んでいたらしいが今回の件で決定したらしい。

しかし、いきなり支援を打ち切っては本局が何を言ってくるかわからない。なので、六課から俺を含む二名の引き抜きと、予算の削減を行うこととした。当然、後見人の方々が文句を言ってきたが、地上の現状の説明と、高町一等空尉の訓練中の過剰攻撃に初出撃時のフォロウなし等を盾にして黙らせたらしい。そのほかにも、あることないことをいったらしいのだが、本人は「言った者勝ちだ。多少脚色はしたが、嘘は言っていない」と言っていた。もっと早くこう言えるようになっていれば大将あたりにいけたのではないだろうか。

この件に関して、八神部隊長もかみついたらしいが他部隊から補充要員を一名選抜していいと条件を出したため、引き下がった。しかしながら、自身が築いた部隊編成になんら疑問を抱いていなかったというのは笑えるを通り越してあきれってしまった。

そんなこんなで、俺ともう一人の六課離脱が決まり本日は呼び出した本人の前に二人で会いに来ていた。そして、そのもう一人と言うのは。

「なんだ、緊張しているのか？ティアナ」

「わ、悪い？将官クラスの人に会うなんて私の階級じゃ普通ありえないでしょ」

そう、俺の冷やかに顔を真っ赤にしながら真横にいるティアナ・ランスターその人である。

先の件で俺以外は、任意で人員を選ぶことになっていたらしい。だが、ティアナが高町一等空尉を拒絶したことにより、あっさりとは決まったらしい。補充要員としては、一〇八部隊のギンガ・ナカジマが決定したらしい。こうして、全体的に見て後方が二人しかいないといつてもバランスの部隊が出来上がった。攻撃的すぎるだろ。そして一〇八部隊のみなさん、ご迷惑をおかけします。個人的に物資の補給をお願いしておきます。中将に。

そんなことは置いておき、レジアス中将の部屋の前までたどり着いた。隣にいるティアナはガチガチである。見ている分には面白いものがあるが、さすがにこのままだと入ってから話が進まないのでは緊張をほぐれさせるようなことを言ってみることにした。

「安心しろ、ティアナ。今から合う中将は、屋台のおでん屋で酔いつぶれて愚痴を言っているようなただのおっさんだ」

「はっ？」

いい感じにポカンとしている。何を言っているんだ、お前はといった表情だ。だが、先程までであった全体的に強張った感じはなくなった。これなら大丈夫だろう。そう思い、呆けているティアナを無視して、ドアをあけた。

「セツナ・カミヤマ。ただいま到着しました」

「……！？テイ、ティアナ・ランスター二等陸士、ただ今到着しました！」

「うむ。それはそうと、セツナ。ずいぶん物言いだな」

どうやら扉の前でしていた会話を聞かれていたらしい。少し俺の方を睨んでくる。元々強面のせいなのか、その迫力はかなりのものである。俺は慣れたのでそこまでないが、隣にいるティアナはびくびくしている。

「いや、事実だろ」

「それはそうだが……。むっ……」

中將が言い淀む姿をみてティアナも少し落ち着いてきた。

そろそろ、中將の娘であり秘書であるオーリスさんの視線が痛くなってきたので、話を進めることにした。

「先日の演説でも話したが、我々は現在魔力が扱えないものでも使用できるデバイスを開発している。セツナは既に了承済みだが、ティアナ・ランスター二等空尉、君にも彼がこれから所属することとなる新型デバイスのテスト部隊へ所属してほしい」

「テスト部隊、ですか？」

「ああ」

そう言って、オーリスさんが俺たちにテスト部隊の資料を見せる。

「既に稼働はしているが、開発スタッフが妙にはりきって数を作りすぎて戦闘要員が足りない状態になってる。だが、地上の現状を考えると、何処から引き抜いてこの部隊に参加させるというのは無理がある。正直に言うと、今回二人を引きぬけたのが幸いだ。無論、断ってくれてもかまわん。その場合はこちらで別の部隊に配属できるよう手続きをしよう」

ティアナは、話を聞き終えた後再び資料に目を通して考え始めた。

side(ティアナ)

執務室に通された時は、緊張のあまり声が詰まってしまった。それに、実際に会ってみると中将の階級にふさわしく、威圧感がすごかった。色々と黒い噂が立っている人物だが、現場からのたたき上げでここまでの階級になったらしい。とりあえず、会った直後までの印象としては黒い噂の絶えない威圧感があるだけの人物だった。

しかし、セツナとは親しい間柄みたいなので悪い人ではないのだろう。

そんなことを考えていると、テスト部隊に入ってほしいと頼まれてしまった。資料に目を通すと、過去に開発されているデバイスなどの資料があった。その中には、一般局員が所有しているポピュラーなものから、何に使うのかまったく分からないものまであった。というか、このドリル型のデバイスなんて何に使うのだろうか。

あ、よく見ると不許可の印が押されている。

それはさておき、中将の話を聞く限り受け取って損はないだろう。体

制もおそらく起動六課よりまともなはずだ。というより、身内だけで固められている部隊なのになぜ私がいたのかが疑問になってきた。スバルとセット扱いだっただろうか。おそらくその可能性が高いだろう。

「やらせてください！」

六課ではセット扱いだっただかもしれない。でも、ここではスバルと一緒にいる「私」ではなく、個人である「私」を見てもらえるかもしれない。

それに目標としている人物の側に行ける。彼に近づくチャンスはおそらくもうないかもしれない。そんなことを考えていると、自然と言葉が出ていた。

「そうか、ありがとう」

目の前には安心した中将の顔があった。

side(セツナ)

ティアナが異動の話を受けてくれたので、何とか部隊の人員を確保できた。現在では

、比較的近距离が得意なメンバーばかりが多かったので助かる。また、部隊指揮を取れる面子があまりにも少なすぎる。

それらを考えるとティアナが来てくれて助かった。というか、本来部隊指揮をしないといけないメンバーが最前線の担当というのがまずい気がする。合流したらそのあたりのことを言ってみるか。



「入隊は明日からになる。資料のほうは後でセツナに渡しておこう。今日はゆっくり休んで明日部隊の宿舎へ向かってくれ」

「了解」

「了解しました」

中將の部屋を出た後は、ロビーのほうでオーリスさんから資料を受け取り、ティアナに渡してそのまま解散した。ティアナは近くのビジネスホテルに、俺は徐々に自分の事務所へと戻った。

さすがに数ヶ月放置していたので埃をかぶっていた。眠れる程度に掃除をしてそのままベットに横になった。

そして、翌日俺は意外な人物と再会を果たすこととなる。

十話（後書き）

ティアナ、六課から離脱　そして新部隊へ

ここからオリジナル展開へ

## 十一話（前書き）

数ヶ月ぶりの投下

色々私生活で忙しかったとです。

## 十一話

### 十一話

中将から異動を命じられた翌日、俺とティアナは地上本部の入り口で待ち合わせをしていた。俺が着いたときにはティアナはすでに到着していた。待ち合わせの時間にはまだ早かったが、どうやら待たせてしまったようだ。

「よう、待たせたみたいだな」

片手を挙げてティアナに声をかける。それに気づいたティアナは軽く頭を下げた。

「荷物の配送手続きが早く来たのよ。思ったより手続きが早く終わっただけよ。それよりも、迎えは誰が来るの？」

「部隊の誰かに車で行かせる、って言ってたが……。と、来たようだ」

話をしていると、俺たちの目の前に一台の車が止まる。ゆっくりとウィンドウが開き、中からは個人的に懐かしい顔が現れた。

「ハーン、セツナ。久しぶりね。ドクターから言われて迎えに来たわよ」

声をかけてきたのは聖王協会のシスター衣装を身にまとった『ドゥーエ』だった。

とりあえず、俺たち二人は後部座席へ乗り込んだ。すると、ドゥーエがこちらの方に振り返ってきた。ドゥーエの顔を見て首をかしげると、彼女は「ああ」と納得したような顔をした。

「そついや、あんたは移動手段はバイクがメインだったわね。隣の娘もたぶんそつかな。とりあえず、シートベルト付けておいてね。最近ここら辺交通にうるさいのよ。この間も路面駐車で切符切られただけだからこれ以上点数引かれないのよ」

「す、すみません！」

「ああ、すまん」

悲壮感漂う顔で言われたら納得するしかない。そうか、しばらく移動手段はバイクと公共機関しか使っていなかったから知らなかったが、世間では自動車の移動の際は後部座席でもするようになったのか。

「で、セツナ。隣の娘が新規に実動隊としてくる子でいいのよね」

「ああ、ティアナ・ランスターだ。指揮官適正はかなりのものだな。戦闘に関しては、実戦経験が少ないが、うちの部隊にいればそのあたりも解消されるだろう」

「ティ、ティアナ・ランスターです。よろしくお願いします！」

「私はドゥーエ。情報収集とかがメインだからあんまり接点はないだろうけどよろしくね」

その後は雑談をしながら目的地である部隊へと向かった。到着す

るころにはティアナの緊張も解けておりドゥーエと仲良く話していた。ちなみに、女性の会話の中に入っていけなかった俺は音楽を聴きながら外の景色を見ていた。

そして、森の中にある開けた場所に存在する基地へとたどり着いた。ドゥーエは地上本局と聖王協会にこれから向かうらしくそのまま別れた。

何故俺たちと合流した時に用事を済まさなかったのだろうかと思つたのは俺だけだろうか。

部隊の建物の中に入ると、明かりはついておらず異様な雰囲気がかもし出していた。それに人の気配が感じられない。

「ティアナ」

「分かつてるわ」

声をかける前から予想していたらしく、お互いの考えが読めた所でデバイスを機動させる。ティアナは正確さを求めて銃はひとつだけだ。こちらは左手に銃、右手に大剣を持ち警戒しながら進む。

向かう先は司令室。部隊を襲撃する際は頭を抑えるのが一般的な手段だ。そして、司令室にたどり着き扉の両端に張り付く。

「行くぞ」

「了解」

ティアナの返事を確認し、扉を開けて正面にデバイスを構える。

扉を開けて聞こえてきたのは火薬が破裂する音。それもひとつではなく複数。あわててティアナを抱きかかえて伏せようとしたが、こちらに飛んできた物の正体に気づく。

「か……紙？」

目の前には色とりどりの細い紙が散らばっている。それを見て、音の正体はクラッカーだと理解した。あまりのことに呆けてしまっているが、真横にいるティアナのほうが状況を理解できずに呆けてしまっている。

「ようこそ、ティアナ・ランスター君。そして久しぶりだね、セツナ。ようこそ、特務部隊ナンバーズへ。私が部隊長のジュエル・スカリエッティだ。いや、君たちを驚かせようとしたのだが、私の予想以上に驚いてくれたようで何よりだよ」

赤みがかった紫色の髪に金色の瞳をした、白衣を纏った男が立っていた。その後ろにはボディースーツに身を包んだ女性が数人立っていた。

「てい、ティアナ・ランスターです！配属の挨拶に参りました」

しばらく呆けていていたティアナの脳がようやく動き出したのか、あわてて敬礼をする。それにあわせて俺も敬礼をする。

「一部のメンバーは出払っていてね。今いるメンバーを紹介しよう。他のメンバーに関しては、戻り次第顔合わせといったところかな。では、順番に挨拶を頼むよ」

「ウーノです。この部隊の補佐などを担当しています」

「トーレだ。前線部隊の隊長をやっている。よろしく頼むぞ」

「クアットロよ。せいぜい足を引っ張らないで下さるかしら？」

「チンクだ。最初のうちはこのことは分からないだろうから、何かあったら力になろう」

「セインです。ま、お互い気楽にいきましょう」

「ノーヴェだ」

「デイエチです。よろしく」

「ウェインディっす。よろしくっす」

と、九人の自己紹介が終わった。その後、軽い雑談を一時間ほどしてドクターとウーノ以外は通常の業務（というか訓練等）にもどっていった。

残されたのは、ティアナ・ドクター・ウーノ・俺の四人である。今から行われるのはこの部隊の設立の背景と目的。一番心配なのはティアナが反発しないかなのだが、はてさて、どうなることやら。

「では、話をしよう。あれは一万四千年前の出来事だったか。まあ、そんなに昔ではないのだがね。少なくとも管理局の地上本部が出来たころまでには話はさかのぼるんだが」



その言葉を聞いた直後、ティアナがおずおずと手を上げる。「ティアナ君、何かな？」とドクターが彼女の発言を促す。

「資料によると、この部隊が稼働し始めたのってここ数年の話ですよね？どうしてそこまでさかのぼる必要があるんでしょうか？」

「確かに。この部隊だけのことを考えると必要ないね。だが、この部隊の設立目的を語る上で地上本部のことも語らなければならないのだよ」

その言葉に納得したのか、「わかりました」と答え再びドクターのほうへと向き直った。

「管理局自体が設立された理由は君も過去に学習してきたので知っていると思う。だが、私は常々疑問に感じていたのだよ。魔法による管理体制が敷かれた場合、魔力の素であるリンカーコアを持たないものはどうなるのか、とね。」

私が調べた限り、そこまで大々的になっていないが確実に持つ者と持たざる者との格差は広がってきている。管理局の階級制度がい例だ。良識的な考えを持ち管理する能力があるものはそれこそたくさん居る。だが、彼らは魔力を持たないため階級が上がることはない。せいぜい上がっても尉官クラスで打ち止めだ。それ以上の階級になった者も大勢いるが、やはり現役といえる年齢でその階級になれることはまずない。技術方面はその限りではないがね、それでも魔力を持っているもののほうが階級が上がりやすい。チカラがあるからこそ階級が上がる。そう言うところ聞こえはいいかもしれないが、実のところ魔力があるから階級が上がるのだよ。

社会批判はここまでにしておこう。ここまで言うておいてなんだ

が、私も一管理局員だからね。まあ、表向きは犯罪者で通っているがそこはおいておこう」

犯罪者、という単語が聞こえた直後にティアナはデバイスを展開。ドクターヘドバイスを突きつける。だが、それに対してドクターは彼女の行動を予測していたのか、少し驚いたようにみせているだけだった。というか、あの態度は絶対わざとだ。それを理解しているのか、ティアナの眉がピクピクと動いている。

「この件については後でしっかり説明をさせていただきます。その話を聴いた上で私を逮捕するというのであれば捉えてもらってもかまわないよ」

「分かりました。とりあえず今は話を聞きます」

とりあえずこの場は収まった。そして、ドクターは咳払いをして続きを話つづける。

「管理局の設立目的というのは一応管理世界の平和を保つため、と銘打ってはいるがね、実のところ上層部の連中は汚職だらけなのだよ。なんか管理局員の汚職事件のニュースなど見ているかもしれないが、あんなものはかわいいもので氷山の一角だ。あれより被害がひどいものになると、数百人単位で被害者が出ている」

汚職に関しては、表面上抑えてはいたがティアナの顔には怒りの表情が少しあらわれていた。しかし、数百人単位での被害者が出ていると聞いた直後、その表情は一変し青いものへと変わった。心配になり「大丈夫か？」と声をかけたが「大丈夫です」と返すだけだった。少し間をおきティアナが落ち着いたところで、ドクターは続きを語り始めた。

「実のところ、黒幕は判明しているのだがね。私たち一部隊が声を上げても冗談、または不敬罪でつかまってしまうのが落ちだ。取り締まるはずの私たちが逆に取り締まられる。なかなか愉快的展開だとは思うが、当人となる私たちには不快気周りない。そうはおもわないかね？」

「は、はあ……」

ドクターの突然の問いかけに、多少どうでもよさげに答えるティアナ。うん、俺でもあんな返事をすると思う。

「実は、数カ月後に黒幕のほとんどが集まるイベントがあるのだよ」

「イベント？」

「そう、地上本部で行われる交換意見陳述会だよ。我々はこの場を鎮圧し、彼らの所業を暴こうと考えている。些か強引だとは思うがこれぐらいしか思い浮かばなくてね。この機会を逃すと、次彼らが集まるのか分からないからね。ああ、彼らの罪状については後で資料を渡そう」

とりあえず、この部隊の目的は地上本部のゴミ掃除のための組織というわけだ。理解してくれたかね？」

「とりあえずは」

この部隊の設立目的については一応の理解はもらえたようだ。とりあえず、は一安心といったところだ。そして、問題はおそらくここからだろう。

「では、少し休憩を挟んだ後に語るとしよう。どうして私が、いや。『我々』が犯罪者として扱われているかをね」

## 十一話（後書き）

プロットを自身もって原作の時間軸と比較したらどえらいことになったので修正。

そして、例の地震等の被害にあってしまいました。

xbox360の落下・モニタの転倒だけの被害でした。5弱だったのにやるな、我が家は。

とりあえず、ようやく書ける時間とモチベーションが上がってきたのでなんとかかなりそうです。

現役時代のテキスト5kb/時の執筆能力が欲しい。  
文章の質はともかく、昔は量だけはかけてたものだ。

とりあえず、今回から新章突入。ここからオリジナルだよ！

## 十二話（前書き）

難産なだったにもかかわらず短い。そしてほとんど会話しかない。  
次回からは通常営業 じゃなくて通常通りに文章を増やせるとおも  
いまっ

何気におまけのほう気合が入っているかもしれない。

## 十二話

### 十二話

休憩し終えて、再び部屋に戻ってきた一同（と言っても先ほどの四人だが）。

ティアナに関しては、管理局の上層部が真つ黒なのがショックだったのか少し精神的に疲れているようだ。

「ふむ、やはり先ほどの話は重かったようだね。別段急ぐわけでもないので、我々の話は後日にするかね？」

「いえ、大丈夫です。お願いします」

「ふむ。では、話を続けよう。キミはプロジェクトFという単語を聞いたことがあるかね？」

ドクターの疑問にティアナはゆっくりと首を横に振る。

「一種のクローン技術だよ。ただし、対象は人間だがね。もともとこの技術はアルハザードがあつた時代に、医療技術として研究されていたものだ。体の一部、早い話が腕や足だね。これらを失つた際に、細胞を採取してその部位を生成して本人の体に移植するという技術だ。本人の細胞から出来ているので移植後の細胞の拒否反応もないのでね、医学に貢献できるかと考えていたのだよ。だが、魔が差したのだろうね。そのうち、体の一部を作り出せるのだから、一人を作り出せるのではないかと考えたのだよ。そしてその実験は成功した。だが、出来上がったのは自分と同じ存在だった。性格は

違うが、その容姿は間違いなく自分の物だったのだよ。その人物が目指していたものは、ただのクローンではなく、似て非なる生命を作り出そうとしていたのだよ。俗に言う人造人間だね」

「人造人間……ですか？」

「ああ。人間を超えるために彼はその人造人間を作り上げようとした。が、ここで問題が起こってね」

ドクターはここで話を区切り、ティアナに「その問題が分かるかね？」と尋ねる。当然ながらティアナはその手の知識がないため、素直に分からないと答えていた。正直なところ、あれだけの情報で分かるものはその手の専門家でなければ分からないだろう。

「まず彼は手っ取り早く遺伝子の情報を書き換えて作るうとした。当然初期のころは失敗ばかりでね、多くの命が犠牲になった。そして、長年のときをかけて彼の研究は完成した。しかしながら、完成とほぼ同時期に彼は死んでしまったので研究成果は公にされなかったがね。そして、その過程で生まれたクローン技術と記憶の転写、ようは記憶を他の肉体にコピーする技術がプロジェクトFと呼ばれるものへとなったのだよ。プロジェクトFについては大雑把にこんなところだね。詳しい話になると、かなり長くなるから気になるなら後で資料を渡そう。何か質問はあるかな？」

「どうして、この話を私にしたんですか？関係ない、とは言いませんけど今話すことではない気がするんですが」

「なかなか鋭いね。では、理由を話そう。この私自身がそのプロジェクトFで生み出され、先ほど話した人物の記憶を植えつけられたからだ。公では彼は死亡扱いはされていないため、彼の罪がそのま



ま私に擦り付けられているのだよ。もつとも、私も脅されて一時期  
そういつた研究に手を出してはいたがね、彼のように命をないがし  
るにしていけないよ。そんなことをすると本当に憎むべき彼と同じに  
なってしまうからね。ちなみに、今その過程で生み出された彼女た  
ちは皆『娘』としてここで生活しているよ」

「え………？」

娘、というところだけやけに楽しそうに語るドクターに、ティ  
アはただ呆ける。そして、目頭を指で押さえうつむく。雰囲気で彼  
女の気持ちを悟るならば「ちよつと待て、こいつなんて言った？」  
だろう。間違いない。俺も初めて聞いたときは同じような感じだっ  
た。

「戦闘機人、という単語なら聞き覚えがあるのではないかね？一部  
を除いてここに居るメンバーは戦闘機人で構成されているんだよ。  
自分たちと同じ存在を二度と生み出さないためにね。ちなみに一部  
グレーゾーンな者はいるが、それ以外はすべて真っ白だよ。」

さて、私が犯罪者である理由は話した。君はこの話を聞いて、鵜  
呑みにしてここに所属するかね？それとも私を管理局へ突き出すか  
ね？」

ニヤニヤしながらドクターはティアナへ告げる。間違いなく彼女  
の返答が分かっているのだろう。そんなドクターの顔を不機嫌に  
らみつけながらも、彼女は答えた。

「今の段階で、あなたの話を信じることは出来ません。ですが、嘘  
とも言い切れません。だから、この部隊でああなたの本当のことを言  
っているか確かめさせてもらいます」

「よろしい！歓迎しよう、ティアナ・ランスター！ようこそ、我が部隊へ！」

ドクターが本当の意味でこの場にティアナをこの部隊へ招いた。

そして、物語は加速する。

## 十二話（後書き）

次回作はこんな感じかもしれない

突然だが、俺ことセツナ・カミヤマ（仮名）は転生者である。

死んだ理由は覚えてないし、神様がやってきて能力くれるといったイベントもなかった。

チートプレイを試してみたかっと思ったのは、やはり自分が厨二病を抜け出せなかったということなのだろう。

そもそも、神と呼ばれるモノがただかだか一人死んだぐらいでどうこうするわけがない。それ以前に自分たちの過失であつても、サービスしてくれるわけがない。ようは、あれだ。企業でいう、書類に記載ミスがあつたから修正するぐらいの感覚だろうから、いちいち個人に謝る訳がない。本人に注意して終了だろう。根本的な問題として、自分たちの命は神と呼ばれるものにとってはそこらへんの石ぐらいの感覚なのだろう。そんな石に何かをつけるわけがない。

話を戻すが、俺が生まれたのはミッドチルダ！そう、ゆくゆくはあの魔砲少女やら、スク水少女がガチバトルを繰り広げる場所だ。せっかくだ、原作ブレイクしてやるぜ！

なんて思っていた時期が俺にもありました。

原作ブレイクなんて考えていたのが数年前。実はあの後すぐにこう思った。家のお隣さんが、ありえない人たちだった。

プレシア・テストロッサ。一期を見た人なら分かると思うが、フェイトを虐待してたんでもないロクデナシだ。だが、アリシアが居たときはとてつもなくいい人だったのは回想シーンでも分かるとおりだ。

そんな人を自分の両親にお隣さんとして紹介されてみる、驚くだろう。だが、こんなのはまだ序の口だった。

何であんたらが同時に存在してんだ、アリシアとフェイトよ……。

話を聞くとどうも二人は双子らしい。さらには、研究所の事故で昨年夫を失ったとか。アリシアの事故フラグがいつの間にか消えていた模様です。

もうわけがわからん。そういえば、そんな二次創作を読んだ記憶があるがパターンとしては希少だったはず。すごい確立の平行世界だ。

「アリシア・テストロッサです！」

「フェ、フェイト・テストロッサです」

アリシアは元気に、フェイトはちょっと控えめに自己紹介を

「セツナ・カミヤマ（仮名）です。よろしく」

こうして、テストロッサ家のお隣さんとしての生活が始まった。

ちなみに、リニス・アルフ両名はちゃんといた。テストロッサ家が見事にそろっていたことを追記しておく。ちなみに、旦那さんは子供が出来たと知ったや否や、すぐさま逃げ出したらしい。ひどい父親だ。そんな父親にはならないようにしよう。うん。

とこんな感じかもしれない。需要があれば書くと思っ。

## 十三話（前書き）

前回よりかはペースは早いけど、それでもペースは遅くなった。 0

r z

そういえば、何気なしに恋愛タグをつけたけど、いまだに恋愛要素のれの字も出てきていないこの作品。

恋愛居いるのか？と疑問に思い始めた。

## 十三話

### 十三話

「潜入任務？」

「ああ。違法研究所をクアットロが見つけてきてね。真つ黒なのは確実なのだがどのような研究をしていたかは完全に機密扱いされていたのだよ。で、君たちによる強襲潜入捜査と犯人の確保をお願いしたい」

ティアナが着てから一カ月後、彼女に関しては主に新型デバイスのテスト要員として働いてもらっている。その合間に、潜入捜査やらのスキルをシミュレーションなどを使って訓練しており確かにそろそろ現場に出せるレベルになってきた。

というか、あいつの飲み込み速度は早すぎる。俺がやったことは、訓練の目的と内容を告げて、基礎的な動作や知識を一通り教えただけだ。それなりに二週間後にはそれなりの隠密行動が出きるようになっていた。

それからは二三日に一度の頻度で、こういった時はどうすれば良いのか、ということ聞いてきた。その中で何個か分からないものがあつたので潜入のエキスパートに聞きに行ったのは懐かしい思い出だ。

後日、短期間で習得できたのかと聞いてみたところ、「結局のところ、応用は基本からの派生でしかないのよ。だから、基本をしつかりと体にしみこませて、後はそこからどんなパターンにでも映れるように動けばいいのよ。流石にパターンを全部覚えるのは大変だったから、デバイ스에パターン登録したけどね。おかげで戦術が増

えたわ」と、嬉々として言われた。

機動六課、こんな逸材をどうしてあそこまでほうっておいたのだろう。正直、あの部隊長より指揮官適正が高い気がするわ。

と、そんなこんなで、彼女にはそろそろテストではなく現場に出しても良いだろうと思っていた矢先での任務だった。ドクターのこただからそれを分かっている任務を依頼してきたのだろう。

「あいにく娘たちは別件の調査でほとんど出払っていてね、行くのは君とティアナ君、それに『シルフィー』君だ。バックアップにクアットロが付く予定だよ」

どこかで聞いたことのある名前だと思い、記憶を探る。そして、その人物に思い当たった。

「ちょっとまで、シルフィーっていうとあれか？俺に戦闘しかけたり武器渡してきたりした」

「ああ、一応彼女はここの部隊所属だからね。いつもは『彼ら』と行動を共にしてるがあちらが落ち着いたので彼女だけ此方に来てもらったのだよ。なんだかんだであまり君たち三人は面識が少ないからね。これを気に仲良くなってもらいたいな、と思ってるね」

「お節介ありがとよ。しかし違法研究所ねえ。何をやらかしているのやら……」

ドクターの執務室から出た後、ティアナとクアットロを引き連れ



て集合場所になっているポイントへと向かった。その道中で、ティアナに今回の任務内容とクアットロから研究所の詳細を聞いた。もともと管理局の研究施設だったが、『表面上』研究員たちのそこにはすでに待機していたであろうシルフィーが待ち構えていた。両手・両足に特徴的な銃をつけており、戦闘準備は整っているようだ。

「久しぶりね、セツナ。それと、そちらの子は初めてかしら。シルフィーよ、よろしくね」

「ティアナ・ランスターです。今日はよろしくお願ひします」

シルフィーが差し出してきた手をティアナが握り返し、お互い軽く自己紹介をする。

いまさらだが、ここでそれぞれの装備を確認してみる。全員、肌に密着するタイプの黒いボディーツを着込んでおり、ティアナと俺はその上に防弾ジャケットを着込んでいる。シルフィーは常時自分の周りにフィールド系の防御フィールドを展開しているらしく、ジャケットは要らないらしい。

話を聞くとSランクオーバーの魔導師らしい。うらやましすぎる。

ティアナにいたっては、腰にクロスミラージユの強化版（サウンドステージXの状態）が二丁、近づかれた時のために、胸付近にナイフを装備している。また、試作型チャージカートリッジを搭載しているため、予備のカートリッジの必要がなくなったので、予備力カートリッジ分は身軽に動けるようになったようだ。

試作型カートリッジは、使用者本人が所持している間本人の魔力

を少しずつ貯めて行き、一定以上溜まると、カートリッジを使用した時と同等以上の魔力を瞬間的に出せるようになる。自分の魔力を使用しているため、使用者と魔力の親和性が取れており体に負担が少ないらしい。ちなみに、既存のカートリッジは使用者とカートリッジの魔力の親和性が悪いがために使用者に負担がかかっているらしい。以前に、ドクターと話していたときにそんなことを言っていた気がする。

シルフィーにいたっては、両手足に拳銃型のデバイスを装備してベヨネッタスタイルの状態だ。各デバイスには試作型カートリッジの初期型が搭載されており、チャージ量は少ないが短時間でそこその威力の攻撃ができるようになっていいる。本人の魔力量がデカイため、すぐにチャージが終わってしまい数発に一発は威力が高いらしい。

最後に、俺の装備は腰の後ろにエボニー・アイボニーを装備。両手足にベオウルフを装備。リベリオンはアイリス内に格納している。順番的にはネヴァンなのだが、どこぞの誰かが「へっ、いい音させるじゃねえか。ちよつと借りてくぜ！俺の歌を聞けー！！」といながら持ち去ったらしい。そのときは母体としていたギターに魔力による弦を生成できて楽器としてしか機能していない状態で持っていたかたらしい。現在、ネヴァンにリベンジしているらしいが、形が気に入らないと言って何度も作り直しているドクターの姿を見かけた。

まあ、それでなくても今回はあくまで潜入ミッションなのでネヴァンは逆に邪魔になるので、先に仕上がっていたベオウルフを装備している。本来なら白銀だが、俺の趣味で黒色にしてある。

と、それぞれの準備は整った。目標を視認できる距離まで近づき

ブリーフィングを始めることにした。

目の前にはクアットロが映し出されているモニターが表示された。

「それでは、作戦を説明しますわ。今回の研究施設は、登録上は管理局の新技术開発のための研究施設として登録されています。しかしながら、ここ数年でこの付近で人が、それも子供が行方不明になったという報告が一ヶ月ごとに三、四件ほどあがってきています。熱源反応を調べたのですが、あの研究所に登録されている人数以上の熱源が確認できたため、潜入することにしましたわ」

「数年前から報告が上がっていたなら、どうして初期段階に気づけなかった？」

「怪しいとは思っていたのですが、熱源の数だけ見ると変動はありませんでした。さらに、ここらでは異種の魔法生物が確認されているため、それに襲われたという可能性のほうが高いとされていました。ですが、一週間ほど前、研究所の熱源反応が数十から一気に数百まで増えたので、さすがに怪しいなと」

「正規ルートでは踏み込めなかったんですか？」

「いくら中将付の部隊とは言っても、登録されている活動は新型デバイスのテスト。そこまでの権限はありませんでしょ」

「ま、早い話がどうせ悪巧みしてるだろうからとっとと現場お証拠押さえて潰してしまえって事でしょ？」

「ええ。話が早くて助かりますわ」

フフフと、シルフィーとクアットロが不気味な笑い声をあげる。

「どうやら、この二人は仲がよさそうだ。」

「私は現在の場所から研究所にハッキングを仕掛けてセキュリティを一時ダウンさせますわ。進入ルートは今転送したマップ通りをお願いしますわ。内部に関しては登録されている情報だけしかありませんので隠し扉等があった場合はご注意を」

「了解。それでは、ミッションスタートと行きますか」

ただの違法研究。潜入するまではその程度の認識しかなかった。しかし、やつらがやっていた事はそれこそ胸糞悪くなるような研究だった。

俺たちは、何も知らずに敵の施設へと潜り込む。

## 十三話（後書き）

次回、グロ注意。

研究員のやつらは胸糞悪く研究をしでかしていたようです。  
皆さんも次回はやつらに怒りをぶつけましょう（え

ちなみに、次回の話と一話にしようと考えてたんですが、見てのと  
おり思ったより長くなってしまったため分けることに

## 十四話（前書き）

意外とスムーズに筆が進んだが、次回の戦闘シーンで苦戦しそうで  
す ^^ ;

前回の最後で自分でハードルを上げすぎて、今回の話が皆さんの予想を下回った感じがしないでもない。

だが、私は謝らない。

## 十四話

### 十四話

渡されたデータに記された通りのルートを辿り、研究所内に潜入する。セキュリティに関しては、クアットロ曰く「今時、監視カメラと生態認証の出入り口だけとか信じられないわね」と、素を少し表に出して言っていた。

「結構歩いてるのに誰とも会わないわね。というか、本当にここ人が居るの?」

「分かりません。でも、何があるか分からないので警戒はしておくべきかと」

「だが、かれこれ数十分移動しているのに誰も見ないというのはおかしい。事前にクアットロが数百規模の熱源を確認しているにもかかわらずだ。一週間でここまで痕跡を消せるものでもないだろう。クアットロ、状況は?」

さすがに誰も見かけないことを不振に思い、クアットロに通信を入れ、こちらの条項を簡単に伝える。しかし、モニタに表示されているのは納得がいかない表情をしているクアットロその人だった。

「クアットロ、どうした?」

さすがに、気になったので

「いえ、ハッキングを仕掛けて数分経つての事なんだけど、セキュ

リテイシステム、全部あちらが自発的に切ってるのよ。逆探知をしようとしたんだけど、アクセス時間がわずかだったせいか、終えないうのよねえ。そして、熱源だけとまだ数百はあるわね。畏の可能性もあるかしら。そっち方面で少し調べてみるわ。そっちはそっちでよろしく」

「こちらが返事をする前に通信が切れる。俺は肩を竦めて二人を見る。二人とも微妙そうな表情を浮かべたままだった。

何はともあれ、改めて研究所を周って漸く中枢コンピュータのある部屋の前へたどり着いた。もちろん扉には鍵がされているが、簡単に壊せる部類だ。

「クアットロ、中枢にたどり着いた。これより突入する」

「分かりましたわ。お気をつけてくださいな」

それぞれ、銃型のデバイスを構える。突入作戦としては、ベオウルフでの蹴りとシルフィーの蹴り銃撃で扉を破壊しいつせいに踏み込む、といった単純なものだ。扉の両脇に各々待機し、それぞれの状態を確認する。お互いがお互いを確認し、頷きあう。

「……三」

多少緊張しているのか、ティアナの少し上ずった声でカウントがスタートする。

「二」

先ほどまでおちゃらけていたシルフィーですら真剣な表情へと変



わっている。

「――！」

ラストのカウントでシルフィーと俺の蹴りが同時に決まり扉を破壊する。

「全員動くな、管理局だ！」

それぞれをフォローする位置で、デバイスを構え中に突入する。しかし、そこには人っ子一人いなかった。さらに言うならば、目の前の機会は起動したままであった。

「とりあえず、データをあさるぞ。テイアナは入り口で見張りを。いやな予感や人の気配を感じたらすぐに連絡。シルフィーは俺と一緒にデータの抽出だ。全部のデータを吸い出すぞ、ここで吟味している余裕はない」

「了解」

「分かったわ」

指示を出したとおりに全員動き始める。全員、持参した媒体に研究所のデータを分担してコピーしている。俺は俺で、中にある資料を読み漁りこの研究所の施設について調べる。おそらくここを調べられるのは今回だけだ。何かをつかんで帰らなければ、ただの不法侵入になってしまう。

資料を漁るが一向に怪しいものが見つからない。駄目元でメールソフトを立ち上げると、そこには俺たちが探していた情報があった。

件名：

地下隔離施設実験成果

本文：

詳細なレポートは地下スタンドアロンサーバーにて保存。

昨日の遺伝子改良実験において、実験体三六八号の細胞にダメージが発生。実験続行は不可能と判断。使えそうな臓器を摘出後、廃棄処分とする。

また、今回の実験で現在の方向では成果が見られないとし、別アプローチで実験を行うと判断。

最後に、管理局の特殊部隊に感づかれたため、本日を持って本研究所を破棄する。資料は全て抹消すること。

以上

ジェイル・スカリエッティ

「ジェイル・スカリエッティだど!？」

突然の俺の叫びに二人は驚き、こちらに近づいてくる。そして、俺の視線の先にある内容にそれぞれ驚きの声を上げる。

しかし、そのメールにはそれ以上に重要なことが書かれてあった。

すでにこの研究所は破棄されて居ること、そして地下があること。

「ドクターに関しては、戻ってから問い詰める。だが、今は地下を調べる。出入り口を探している暇はない。シルフィー、やれるな？」

「……アイツのことに關しては納得いかないけど、とりあえず仕事はこなさないとね。了解したわ」

シルフィーの返事に頷き、今度はティアナを見る。しかし、その表情は思ったより落ち着いては居るが、動揺は隠せていなかった。

「ティアナ、シヨックなのは分かるが、今はやるべきことをやるぞ」

「……分かつてるわよ」

「クアットロ、この施設はすでに放棄されていた。また、地下施設も確認できたので今から強行突破をする。いいな？」

「了解しましたわ。失礼ですが、どうやら何かがこちらに近づいていますので私は身を隠しますわ。脱出後、所定の位置で合流を。目的はそちらのようですからお気をつけてくださいね」

伝えることだけ伝えようと、クアットロは通信を切った。どうやら、切羽詰っていた状態らしい。

とりあえず、研究所のマップを検索し地下の場所を特定する。そして入り口があるフロアの真上まで移動し、破壊して移動。扉の前まで移動する。おそらく、研究所の人間はここには居ないだろう。だが、予想が正しければここに熱源数百の現況がある。

心を決め、俺たちは中に突入することにした。

「行くぞっ！」

扉を爆破し、中に入る。中に入ったのは創造をはるかに絶するものだった。

数百もの培養液がこめられたカプセル。そして、その中には子供の姿があった。しかし、全員が全員、『体の一部が欠損、および露出していた』軽いものですら、四肢のどれかを失っていた。しかも、切断面は何かを引き千切られたような状態で、止血や千切られた痕を治療した形跡もない。酷いものになると脳や胸部が開かれた状態の人も居た。死んでいるなら、まだ、冷静さが保っていただろう。しかし、胸を開かれた子供を見るとその心臓は確かに脈打っていた。生きている証だ。

ざっと見て回ったが、彼らがつけている呼吸器の隙間から空気が漏れ泡となってカプセルの上のほうへと向かっていった。それを確認し、息をしているであろうことが見て取れる。

彼らは間違いなく『生きている』のだ。

シルフィーは顔をしかめ、ティアナは余りの惨状に口を押さえ吐きそうになっている。多少の覚悟はあったが流石にこれは心臓に悪い。流石に二人に中を調べさせるのは気が引けたので、二人には外で待機してもらうことにした。

「誰かはしらねえが、必ず追い詰めてやる……」

こんなことをした奴等に怒りと殺意を覚え思わず思っていたことが口から出る。目を閉じ二、三度深呼吸をして気分を落ち着ける。この程度で落ち着きはしないが、幾分マシになってきた。

奥のほうへ向かうと、かすかに呻き声が聞こえる。よく耳を澄ませ、声が聞こえた方向へむかうと、一人の少女が蹲っていた。

「大丈夫か!？」

「だ……れ……?」

顔を上げた少女は、先ほどまで見ていた子供たちとは違い五体満足だった。しかし、目に光はなくやせ細っており、視線は俺ではなくどこか虚空を見つめていた。

「君たちを助けに来た」

「助け……に……?」

やさしく抱き上げると、少女はそのまま気を失ってしまった。その奥に目をやるが、おそらく俺たちが捜し求めていたであろうサーバーは物理的に見事なまでに破壊されていた。おそらくこれ以上の収集は望めないと思い、彼女を背負い二人の待つ場所へ戻った。

「セツナ、その子は?」

「奥で蹲っていた。体が限界だったのか俺が声をかけたら気を失ったよ」

「その子は無事なんですか?」

「みたいだ。中に居た子供たちも生きてはいる。ドクターに頼めばおそらく助けられるだろう。あと、奥にサーバーがあったがもの

見事に破壊されていた。これ以上の収集は望めそうにないのでいったん撤収。すぐさまドクターに連絡を取って子供たちの救出を……」

シャリン

金属が軽くこすれる音がする。いつせいにそちらの方を見ると三度笠を深くかぶり、全身黒ずくめで杖を持った男がその場に居た。

「研究所の秘密を知ったものを生かしておくわけには行かぬ。ここで散って逝け」

一步、また一步とこちらにゆっくりと歩いてくる。おそらくインファイトが奴の戦法だろう。だとすると、この二人は射撃がメインなため不利すぎる。

「その子連れて先に合流ポイントへ」

「あんたはどうするのよ!?!」

「何、ちょっとアイツと遊んでくる」

シルフィーの方を向き、にやりと笑う。その表情を見たシルフィーはあきらめたかのような表情になり、子供を背負う。

「ジャンボパフェドラックス、私とティアナの分奢りなさいよ?行くわよ、ティアナ!」

「で、でも」

突然の事態に判断を鈍らせるティアナ。敵の攻撃範囲まで余り時

間がない。正直、目の前の相手と対峙してティアナを気にする余裕は生まれないだろう。だからこそ、俺は叫ぶ。

「行け！」

俺の声に後押しされてティアナはシルフィーに付いて行きこの場をさる。

「アイリス、武装全展開。今回ばかりは遊んですむような相手じゃないみたいだ」

『了解、エボニー・アイボニー、リベリオン展開。同時にバリアジヤケット展開』

もの一瞬で俺の体にいつもの戦闘用のスタイルが変わる。それが合図となり、両者が一気に距離をつめる。

「いざいざ」

「へっ、てめえには洗いざらい話してもらっぜ！」

二つの影が交差し、地下フロアでの戦闘が始まった。

## 十四話（後書き）

三度笠の男は烈火竜さんから頂いたキャラを使用させていただきました。最初は6人衆で少し抜けてる、なんてな感じだったのですが、流石にこれ以上キャラを増やすと自分が把握できなくなる＆性格についてはシリアスにしないと今後出しにくいということで、まじめなものに少々変更。

あらためて、烈火竜さん。キャラ提供ありがとうございました。

研究所編は次回でひとまずの終わりを迎えます。間に少女の話を含んでとうとう物語りは公開意見陳述会へ。

そして、次回はおそらく誰も予想していないあの方々が出てきます。

そろそろ終わりが見えてきたので次回作のプロットを考えてみる。

思いついたのは以下の3つ。

1. 以前ネタで書いた「隣の家はテストロッサ家」的な常時原作ブレイクなお話
2. ガンダム00の機体でマブラヴの世界で無双っぽいことをするお話
3. ISの世界で男の威厳を取り戻すためにダブルオーっぽい機体を駆り戦うお話

ロボものを書きたいけど、描写が人以上に難しいから悩む。

ちなみに上記はアンケートとかではなく、「今のところこんな考えてるよー」程度に知ってもらえれば と思って書きました。



目指せ、次回投稿今週末

## 十五話（前書き）

もらった感想をよんで「ドキリ」とすることってありますよね？  
この作品でも数回そんなことがありました。

数ヶ月ぶりの投稿がこんな出来で申し訳ない。

## 十五話

### 十五話

相手の杖とこちらの拳が交差する。剣を使いたいところだが、予想以上に相手に密着されなかなか離れる隙がない。

瞬間的に魔力を放出し、右の拳を突き出す。それ連続の攻撃を警戒してか、相手は一度後ろに跳び、それにあわせてこちらも大きく後方に跳ぶ。その後「しまった」と顔（と言っても口元しか見えないが）をするが遅い。すぐさま銃を引き抜き牽制で連射する。しかし、相手はこちらの魔力弾を杖でなんなく叩き落とす。こんなときばかりは自分の魔力量の少なさが恨めしい。

だが、これで剣が使える。着地と同時に剣を抜きそのまま相手に跳び、剣を振り下ろす。しかしながら、相手は杖でそれを受け止める。だが、跳躍による加速と振り下ろしによる衝撃が合わさり、相手は少し後ずさる。

「ちっ！」

「ぶっ」

しとめそこない舌打ちをする。大振りだったためか、次の行動までの間に隙ができてしまった。相手は体勢を立て直し、再びこちらに攻撃を仕掛ける。

多少よけそこない、頬が切れる。だが、タイミングをあわせこちらも相手の喉元に剣を突きつける。

「何が目的だ！ここで何の研究をしていた！」

「これより消え去る者に語る言葉はない」

「反射的にお互い距離をとり、再び攻撃をする。連続で攻撃をするが、こちらの攻撃は全て防がれている。たまに攻守が入れ替わったりしたが、お互い決定打を出さずにここまでできた。」

「そこで、俺はある一点に気づいた。いや、気づいたとしてもどうしようもないかもしれないが。思い返せば、最初の攻撃こそこちらを殺す気だったがそれ以降はあまり積極的に攻撃してこなかった。もしやこれは……。」

「時間稼ぎかよっ!?!?」

「ご名答。まもなくここにはたしか「核兵器」だったか。それがやってくる。もはや逃げようとしても無駄だ。さて、当初の目的は半分ほどしか達成できなかったが、よしとし……。」

「奴が言葉を言い終わろうとした時に、真横の壁が爆発音と共に壊れた。」

「ハアアアアアア!!」

低い声と共に三十代ほどの男性が槍を構え敵に突進して行った。

「!?!?もう追いついたと言っのか!?!?」

敵は男の猛攻を何とかかわし体制を整えなおそうとする。しかし、奴の退路を青い道が防いだ。

「逃がさないわよ!?!?」

今度は一人の女性が青い道をローラーブレードで走り敵を殴りつける。何とか受身を取っていたが、予想以上の衝撃だったのか立つのがやっとのようだ。

そして止めに、立ち上がった奴の周りには大量の小さな昆虫のようなものが控えていた。

この戦術に戦法。もしかして……。

「セツナ、大丈夫だったか？」

「やつほー。相変わらず無茶してるわね」

「お久しぶりです。込み入った話は後ですとして、今は目の前の敵をどうにかしましょう」

目の前にいたのは『公式記録上』死亡扱いされてる、ゼスト隊のトップである三人のゼスト・グランガイツ、クイント・ナカジマ、メガーヌ・アルビーノだった。

「三人とも、どうしてここに？」

「何、俺たちの任務がこいつの捕獲だったただけだ。もつとも、先ほどの話が事実だとすると我々もそろそろ脱出しなければ危ないがな」

ゼストから簡単な説明を受け、銃を引き抜き戦闘態勢にもどる。

流石にこのメンツだと後方にいないとバランスが悪い。

そして、全員が体勢を整えたところで改めて向き直る。

「流石に部が悪い。我はここで引かせていただこつ」

そういつと懐からスイッチのようなものを押し、その場から姿を消した。

「っ！？また逃げられたか」

「って、ゆつくりしてる暇はないわよ！もうちょっとでここもやばいんじゃないの！？」

「流石に転送魔法はここにいる人たちを送るだけで精一杯よ。さつきもシルフィーちゃん達三人も転送したから、流石に余裕はないわ」

「待ってくれ！この奥には実験体にされていた子供達が！」

「っ！？ごめんなさい……それでもやっぱり……」

俺の言葉に全員が反応するが、メガー又さんが申し訳なさそうに告げる。予想はしていた。先ほど召還したときもつつすらと汗が浮かんでいたのだ。おそらく、転送に関しても本当にあと一回が限界なのだろう。

「くそっ！また俺達は遅かったと言うのか！」

ゼストは叫びながら自らの拳で壁を殴りつける。行動ではあらわしていないにしても他の二人も歯をかみ締めている。

「ここで立ち止まっている時間はないわ。私達は進むしかない」

悔しそうな表情を浮かべ、クイントさんは全員に向かって言う。

「……ああ、分かっている。分かっているさ！」

そして、俺達は研究施設から去り部隊の基地へと戻ってきた。数百人の子供達の命を見捨てて。

戻ってきた俺達を迎えたのは先に戻ったティアナ・シルフィー・クアットロだった。なにか俺に向かって呼びかけていたが、まったく耳にはいってこなかった。

そして、俺はあることの確認のためにジェイルの元へと向かった。

「やあ、ご苦労様だったね。今回の件は私が『管理局の闇』を甘く見ていたのが原因だ。まさか、自らが禁止している質量兵器すら使って証拠を隠滅してくるとはね。君達を予想以上の窮地に追いやってしまったてすまない」

ねぎらいの言葉をかけてくるが、今の俺は一切聞く気はなかった。そして、ジェイルの胸ぐらをつかみあげる。

「ねぎらいの言葉なんかどうでもいい。ひとつだけ確認したいことがある。どうしてあの研究所にてめえの名前があった？」

その言葉に研究所を調査していたメンバー以外は驚きの声を上げる。

「せ、セツナ。それは本当かい？」

「あいにくと冗談を言える気分じゃなくてな。もし本当にてめえが関わっていたなら、今ここで貴様を全力で潰す……」

殺気をこめてジェイルをにらみつける。しかし、奴は何か考え込むような表情をしておりこちらのさっきには一切気にしていないようだった。

「ゼスト君、結果はどうだったかい？」

「あ、ああ。黒だった。」

胸ぐらをつかみあげられすさまじいほどの殺気を向けられているのに平然と質問をしてくるジェイル。

動揺しながらも報告をするゼスト。一体どうなっているんだ。

「セツナ、君の言いたいことは分かっている。だが、一度手を離して全員を招集してくれ。事態は思った以上にまずい方向へ転がり始めてしまった。下手をすれば間に合わないかもしれない」

真剣な表情でこちらを見据え訴えてくる。

「この件に関係あるんだろうな？」

「ああ。ゼスト君の結果を聞いて判明した。薄々そんな予感がしていたが、もはや本当になってしまつとは……」

ひとまずジェイルを開放する。しかし、俺が知らないところで何が起こっているんだ。

そして俺達は、自分達の敵が予想以上に大きな存在だったことを知ることになる。



## 十五話（後書き）

後味の悪い任務でした。そして、ゼスト隊登場。あのメンツだった  
らセツナは中衛にまわらないとバランスが悪いとです。

次回で研究施設編は本当の意味で解決。そして物語は加速していく  
予定

原作とおなじ26話ぐらいで終りそうなきがするが、もしかしたら  
それより早く終るかもしれない。

このクオリティだと長くなる可能性も…… orz

今回は今月中に投稿できるようにがんばります。

## 十六話（前書き）

最短話＋ほぼ会話という駄目駄目な出来。

だが、後悔はしていない。反省はしているけどな！

## 十六話

### 十六話

ドクターによる召集で全員がミーティングルームに集まる。ちらほらと見ない顔があるが、どうやら残りのナンバーズがそろったようだ。

俺は壁際に寄りかかりドクターをにらみつけながら話が始まるのを待った。

「さて、諸君らに集まってもらったのは他でもないよ。ようやく黒幕の奴等が何をたくらんでいるのが判明した。そして、やつらに手を貸していた人物もようやく判明した。それがこいつだ」

スクリーンに映し出されたのは今日の前に居るドクターと瓜二つの人物であった。思わずつかみかかりそうになるが、モニターの人物にはどこか微妙な違和感を感じる。

「眼が赤い……」

誰かのつぶやきが聞こえ、違和感の正体が判明する。しかし、それを除けば瓜二つといっても過言ではない。そして、ひとつの予測にたどり着く。

「まさか!?!」

「そう、僕のオリジナルだよ。もしかして、という考えはあったよ。

僕が生み出された経緯を考えればね。彼の遺伝子を使って僕は作られた。では、その遺伝子は『何処』から来たんだろうと。可能性のひとつとしては考えてはいたよ。だが、そうあってほしくない。科学者である私が珍しく神に祈ったよ。しかし、結果はご覧のとおりだ。僕の行ったことのないところで僕の目撃情報があつてね、ゼスト君たちに調べてもらったらご丁寧にオリジナルの僕が彼らを歓迎してくれたらしいよ。あとは君達が知るとおりさ。例の研究施設はオリジナルがしばらく滞在していた場所だったろうね」

「あの施設もオリジナルが作ったとでもいいのか？」

「察しがいいね。でもね、セツナ。どんなことがあれ僕はある所に取り残された子供達をあのまま放って置く事はしない。たとえ、何があつたとしてもね」

本当にジェイルの言うとおりオリジナルが作ったのか、という疑問を抱きつつ質問を投げた。

そして、返ってきたのは力強い意思と瞳を持ったジェイルの返事だった。その眼の中には表には出ていないものの怒りがこもっていた。

「ひとまずは信じるよ。俺自身が相対したわけじゃないからな」

「助かるよ。ちなみに、今から話すことが今回集まってもらった理由だ。公開意見陳述会が一月早まった」

「……！？」

ジェイルの言葉に全員息を呑む。

おかしい。一週間前後のズレは予想していた。だが、さすがに一ヶ月早まるのはおかしすぎる。なにがどうなっているんだ。

「どうということだ？」

皆の意見をゼストが代弁する。しかし、ジェイルは首を力なく横に振る。

「どうもこうもないよ。レジアス中将も、『例の三人』から一方的に告げられただけらしいからね。それよりも危惧しなければならぬのは、それだけ奴等の方が準備が整っているということだ。僕の予想だとこちらより上回る戦力が用意されているだろうね。他の世界にも連絡は入れているが、おそらくすぐに動けるのは最終的には僕達だけになる。ガジェットも相当数用意する予定だったけど、期日を考えると総定数には達しない。厳しい戦いになる」

全員の間には沈黙が下りる。戦力は相手が上。こちらは個々の能力が高くて、連携に関してはまだ甘いところがある。完全な連携を組めるのはゼスト隊のメンバーだけだろう。対してナンバーズに関しては特定の組み合わせの連携はそれなりに訓練はしているが、実戦経験が浅いメンバーがほとんどだ。いざという時即座に対応できるか怪しいものがある。

「可能な限り、僕のほうでも戦力は集めておくよ。だけど、あまり期待はしないでほしい。駄目元での召集だからね。君達にはより実戦にちかい戦闘訓練、及び任務に出てもらいたい。ゼスト隊の皆は、申し訳ないけど陳述会までは皆の教導にあたってほしい」

「分かった」

「了解。ビシバシ鍛えるわ」

「ええ、分かったわ」

ジェイルの頼みに、ゼスト、クイント、メガー又は真剣な表情で答える。

「それでは諸君、期日まで時間がない。今まで以上に厳しくなると思うが皆、よろしく頼む」

「了解！」

全員が返事をしたところで、会議は終了となった。さつそくゼスト隊のメンバーは他のメンバーの教導メニューを考えるため全員を連れ訓練室へ向かった。

そして、ミーティングルームには俺とドクターの二人になった。

「ジェイル。『アレ』の準備を頼む」

「……本気かい？」

「ああ、話を聴く限り必要になりそうだ。よろしく頼む」

「分かったよ、準備だけはしておくよ。できるなら使ってほしくないんだけどね」

「じゃ、俺も訓練に行つて来るわ」

ジェイルにあることを頼み、ミーティングルームを後にする。そ

して、訓練場へと向かった。

それからの一ヶ月は各自訓練や任務に従事し、着実に経験を積んでいった。そして、ミッドチルダ全体を揺るがす事件が着実に足音を響かせて近づいて来ていた。

地上本部公開意見陳述会まで残り一日

## 十六話（後書き）

いよいよ陳述会開催。原作とかけ離れた展開へLet's GO

とうとうここまでこぎつけた。

ここからさらに原作なんてなかった展開ですので、原作通りじゃないと嫌だ。って方はご注意ください

とここで注意してみる。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7581n/>

---

リリカルなのはStrikerS ~ 管理局変革への軌跡 ~

2011年12月1日01時46分発行